



リステラス星圏史略
古資料ファイル 4-1
『山百合と銀の楡』



(発掘整理一旦完了)

霧樹里守 & 土岐真扉

《 大 地 世 界 》
物 語

設定ノート...

『宝玉物語』

『山百合と銀の楡』

ダレムアス・シリーズ備考。

『 宝玉物語 概要 』（☆中三、とノートの表紙に書いてある☆）

2006年7月19日 [連載（2周目・大地世界物語）](#)

それを持つ者の願いなら なんでも一つだけかなえてくれるという上（かみ）つ昔の魔法のかかった 宝玉 "ルマルウンのかけら"。ただし"正当な持ち主"よりゆずり受けたので なければその力を発揮しない。

ある日、山すその小さな村に住むオテンバな少女マシカは山奥の小さな湖水に一人の美しいエルフが舞いおりて来たのを見つけた。

エルフは月立（つきたち）の国の女王に仕える騎士であり、大事な伝言をたずさえて急ぎの使者としてつかわされたのだが途中 肩に傷を負って手当て のために一時おりたっただった。

マシカの家で手当てを受けたエルフは 一週間後 マシカに対する愛を告げ、"ルマルウンのかけら" をマシカの手にのこして旅出た。

数年後（ダレムアスでは5・6年ぐらいではほとんど年を取りません）マシカの村に一人の放浪騎士がやってきてマシカの家泊まった。彼は実は都からおちのびてきたマーシャル王子であつたのだが、身分を偽り ヤスカルと名乗っていた。

ヤスカは どこか妹姫におもかげの似たマシカを愛するようになり、二人はよく遠乗りに出かけた。

しかし、山奥の城に住むボルドムント鬼王がマシカの容色に目をつけ（ロリコンツ）てヤスカを殺そうとし、マシカは王子を助けるために宝玉を使ってしまった。

さらわれて行くマシカから宝玉を受けとった王子は必死でマシカを救い出したが傷を負い、鬼王と相打ちになって死んだ。

この時、フェイリーシャの形身である "白の破魔弓" がマシカの手に残された。さらに 数年たって マシカのもとへ マーシャが訪れ、再び勢いをもちなおした鬼王がマーシャの命とマシカをねらって村に襲いかかった。

村人たちは自らを犠牲にしてマーシャとマシカを地下道から逃がし、村は鉄砲水につぶされた。

マーシャとわかれたマシカは髪を切り、エルフを探して旅出た。

宝玉石物語 設定ノート（あけみとの合作アニメの原作として。）

[宝玉石物語 設定ノート（あけみとの合作アニメの原作として。）](#)

2016年3月3日 [リステラス星圏史略（創作）コメント\(1\)](#)

"宝玉石物語" 設定ノート ♪

☆題名： 宝玉石物語 ... ルマルウンのかけら ...

☆舞台： ダレムアス（大地世界）・ミアテイネア地方。
行きあたり村 星ヶ沼 近辺。

☆登場人物：

- ・ マシカ（星の娘）・サユライ（山百合）
孤児の村娘、"おばば"に育てられる。
空想好きで奔放。村一の薬師、弓手。
- ・ フェルラダル（銀の楡）
飛仙族の若長。仙女皇セイラの実兄。
- ・ ミヤセル = 皇子マリシアル。
- ・ etc. （村人達。鬼王とその配下。）

☆目標枚数： 150枚。

☆テーマ： ダレムアス・ファンタジー書きたい！

☆目的： あけみとの合作アニメの原作として。

[宝 玉 物 語 ～ 星の娘と銀の楡 ～ （ 1 9 8 3 . 1 0 . 8 ）](#)

2016年3月3日 [リステラス星圏史略](#) [（創作）](#) [コメント \(1\)](#)

宝 玉 物 語 ～ 星の娘と銀の楡 ～

（大地世界シリーズ・第3巻にあたる）

落都

~~主人公フェルラダル。名は伏せておくこと。皇都近郊で戦列に加わっていた彼は急に気づいてとってかえすが、皇の自害に間に合わず、救出を拒む妹女皇の死を見とどけて失意のうちに都をおちる。~~

銀の楡

主人公マシカ。社会状況・生活形態に関する描写は避ける。

満月の晩に水浴に出た沼でエルフエリに出会い、旅を続けようとするのをおしとどめて看病する。1週間後、彼はひとそろいの弓矢と宝玉を残して飛び立って行く。

ルマルウンのかけら

主人公ヤヌカミヤセル（皇子マリシアル）。所々マシカ中心に生活描写。

仮の宿

皇都からの落ち武者ヤルヌミヤセルは妹を探して"いきあたりの村""道の果ての村"にたどりつく。崖くずれして足止めされるうちに、ある日、妹によく似た瞳を持つ少女、マシカに出会う。

長い逗留

出発を1日のぼしにするうちに、村人たちの好意に見守られて2人は次第に親しくなっていた。互いに断片的な身の上話などしあっているうちに、マシカはふとしたことで疑問を抱くようになる。（ヤルスの正体と彼の愛する者について）

そんなある日、遠のりに出た2人の姿を鬼の王ブルグムヌットが目にする。

鬼の王

さらわれるマシカをとり戻そうとして重傷を負ったヤルス。彼を救うために身の護りである宝玉を使ってしまい、マシカは鬼王に捕われて行く。後を追ってヤルスも鬼王城に潜入するが、見

知らぬ武器をこん棒がわりに使って暴発させてしまい、致命傷を負う。かろうじて救い出したマシカに自分が本当に愛しているのは妹皇女であると告白し、破邪の弓と剣を託して火薬庫と運命を共にする。

皇の子（仮題）

ヤルスの消息を追って"行きあたり村"にたどりついたマーシャたち。村人に教えられてマシカの家を訪ずれると、1目会った途端に正体を言い当てられてしまう。本題に入ろうという時に村から急が伝えられ、隠れ道づたいに鬼たちに追われながら古洞に入る。道すがらマシカがヤルスの最後を話して聞かせ、東の大草原についた時、ヤルスの剣と弓をマーシャに、マーシャの地球製の短刀をマシカに、互いに与えて彼らは別れた。

1983. 10. 8.

"宝玉物語"は私にとっての"旅立ちの類型"のひとつなのだと思う。

キャラ設定的ならくがき。... (高校?)

[キャラ設定的ならくがき。... \(高校?\)](#)

2016年3月3日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

上：マリシアル皇子



中：マシカ、年齢差。



下：フェルラダルと出会った頃のマシカ。9 歳。



『宝玉物語』 もしくは 『山百合と銀の楡』
設定ノート

b y

マヤ・トーノ・トウ・トオメ

とうみ ま や と

遠海真谷人

とうの まやと

貴野真谷

2006年7月18日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

扉はきつく閉ざされておりました。そろそろと火の手がのまわりはじめた奥宮の広間の中央に、彼女はひとり毅然と立ち尽して何事かを待っていました。足音が聞こえて来ます。疲れ切った、けれどどんな深傷の痛みをも忘れて果てて、ただにひた走って来る足音なのでした。待っていた貴女はわずかに扉に、歩み寄りたげにして止めました。

「マーイアラフ！」

~~彼は取りつくなり激しく扉を打ち始めました。~~

打ち砕かんばかりに扉は激しく乱打されました。

「マーイアラフ！ 居るのだろうそこに。マーイア！」

青銀の光が輪郭を透かし、飛仙の力が扉を押し開こうとします。貴女はためらわずたおやかな腕をあげ、碧の輝やきが放たれて扉を包みこみました。

「マーイアラフ、何をする?！」

「お静かに、兄上様」

飛仙一族の貴女は、 ました。

「皇(おう)陛下にはすでに御他界なされました。今や奥津城になろうとするこの宮へ、何の用がおありで騒ぎを持ち込まれようというのです。」

「マーイアラフ！ そなたは……」

扉の外で、妹の決然とした声を耳にしながらなおもその結界力を打ち砕こうとむなしく振り当てた両腕に、がくりと体を預けて彼は声を絞り出しました。

「……頼む。出て来るのだ。マーイアラフ。私達にならまだいくらでも逃げのびる途はある。出て来るのだ。死が怖ろしくはないのか。」

「兄上様、皇は亡くなられたのです」

「マーイアラフ！ そなたは未だ千年と生きてはいないのだぞ！」

「……故意に、お忘れですか、お兄さま？」

燃え広がる炎の広間の中で妹は美しく微笑みました。

「節を通させて下さいませ。わたくしは、皇に嫁した、ダレムアスの女皇(めのきみ)なのですよ。人の子たる皇陛下の命数に、殉じます」

「マーイアラフ！」

「仙女皇セイラ。あなたがたを悲しませた娘(セイ ウィラ ノリ ウィラ ウアマ)、ですわ。お許し下さいませ、皆を嘆かせたわたくしの、これが最後の我がままですわ」

エルフエリは力を失い、扉に背をもたせました。

「そうか……」

「わたくしは、短き生を自ら選び取ったのですから。それが予定より早まってしまったとは

言え」

「そなたはこの日の来る事を予覚していたのだな。未来（さき）を視る瞳の陛下」

若々しい女皇は答えず、兄もそれ以上言葉を継ぎませんでした。炎が静かに城中を飲みつくそうとしていました。明るい広間の内ではオレンジの炎が。崩折れるエルフエリの囿りでは暗く昏い赤い焰が。

「お兄さま？ 御逃げ下さいませ」

「……小さかった私のマーイアー。酷い事を言うな」

「皇女と皇子達は逃げのびました。子供達をお願い申します」

『ルマルウンのかけら』

2006年7月19日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

上つ昔 一人の女神ありき

ルマルウンという名の女神ありき

女神ルマルウン 他の神々と違って

その魂（こころ）をば 水晶の中に住ませたり

淡色の紫水晶の中に住ませたり



天（あま）つ神人（かみうど）のごと美（かな）しければ

神々 皆 かの女神（ひと）を愛すなり

人間（ひと） 皆 かの女神（ひと）を愛すなり

「ルア・マルライン落城について。」（たぶん中3?）

「ルア・マルライン落城について。」（たぶん中3?）

2016年2月26日 リステラス星圏史略（創作）



各国の例にもれず、皇領内においても古き門跡に対して厳しい警戒の陣が敷かれていた。__の6日未明、白都皇居にタンナルスラ洞内におけるさけ目の発生が報告され、やがて到来するであろうボルドムの軍勢に備えて、飛仙一族の長子にして皇の義兄、エルフエリの殿銀の楡フェルラが皇都の主力軍を率いてタンナルスラへ向った。

（タンナルスラ～ルア・マルライン間は馬で二日の行程であり、万がいちワナであった場合にも、他の洞から攻め寄せた敵軍が皇都に取りつく前に、とって返って護りにつける筈であった。）

—9日夕刻、最後の古洞の位置をつきとめたエルシャマ—リヤの、悲痛な

「ごうごうと白都は燃えていました。」（たぶん中2？）

「ごうごうと白都は燃えていました。」（たぶん中2？）

2016年2月18日 リステラス星圏史略（創作）

ごうごうと白都は燃えていました。ダレムアスの皇（おう）の都は陥ちたのです。その、星々をも焦がさんばかりに伸びあがる焔の渦中を、ただ一人の飛仙だけが天（あま）駆けておりました。

「マーイアラフ！ マーイアラフ！」

彼の声が切れ切れに、突風に吹きさらわれながら響きわたっては消えて行くことでしょう。高く、たかく炎熱をさけて虚空にと舞い上がりながら、それでも彼は未だ彼（か）の地を飛び去り難く、宙に足を踏まえてとどまっておりました。

馬手（めて）には血塗られた折れた抜身を、弓手にいまや形見になろうとしている唯一の宝玉を握りしめて...

炎のかま首が、昏い歓喜にうちふるえるかのように身をもたげるその上に、彼の傷の血が滴って、まばゆい黄金の火花を散らしました。

白き都の城は音もなく崩れ果て、奥宮の、つい先程まではあった筈のあたりから、ひとすじこの世のものとも思われず限りなく清浄な碧（みどり）色の炎がぱりぱりと燃えたちました。飛仙の悲痛な叫びが不穏をおしかくす夜空をひきさきます。

「マーイアー...！」

邪悪な種族のうちの羽を持つ生き物たちが、一人落ちのびようとする虚空の彼に目をつけて、けがらわしく再び襲いかかろうと跳ね上がって来ました。

既に浅からぬ傷を負い、疲れ果て...

そして何よりもの死、それのみを自ら願いながら、彼は託された役割を果たすためだけに血路を切り開き、ただ、一路、東へと...

(仙女皇セイラの辞世の句。とフェルラダルの返歌?) (中学生??)

(草稿／仙女皇セイラの辞世の句。とフェルラダルの返歌?)

...だよな、たぶん... (^_^;) ...☆ (中学生??)

2016年3月3日 リステラス星圏史略 (創作) コメント (1)

荒風に 森の木倒れ
木の枝の 折れて枯るとも
人の子の 働き疲れて
糧ひさぐ その炊き屋の
飯炊く かまどみたして
炎となるらむ

生涯 通して ただの一度も
嘘つくことをしていぬと
おまえはいつも自慢にしては
誇らかに
笑っていたのに森の花
とうとう最後に約束を
破って逝くのか わたしとの
こんなことなら わたしはおまえを
手放したりは しなかった

ひかりに わらい
ながれに はなし
※セリアを 従え
風に駆け

おまえはいつでも全てを愛して
誇らかに
歌っていたのに森の花
愛を痛みに

笑いを哀に

変えて逝くのかどうしても

こんなことならわたしはおまえを

手放したりは しなかった

※一角獣。

『山百合と銀の楡』

「大地世界（ダレムアス）・ストーリー番外」（中2？）

2016年2月18日 リステラス星圏史略（創作）

大地世界（ダレムアス）・ストーリー番外

宝 玉 物 語 ー ルマルウンのかけら ー

"山百合と銀の楡"

- ・ エルフエリ、城を落ちる。
- ~~・ ミニタ、小言をいう。（マシカの回想シーン？）~~
- ・ マシカ、樹にのぼる。
- ・ マシカ、エルフエリを見つける。
- ・ エルフエリの治療シーン。
- ・ マシカ、夢にまよいこむ。（エルフエリの追想）
- ・ エルフエリ、救われる。
- ... ・ ... ・ ... ・ ...
- ・ エルフエリ、目覚める。
- ・ マシカ、エルフエリの髪を切る。
- ・ 平和な時間の描写。（不安（わかれ）への予感）
- ・ エルフエリ、旅だちを告げる。

・ 2人、星ヶ沼のほとりへ。

・ エルフエリ、旅だつ。

「月光」 (中2?)

「月光」 (中2?)

2016年2月18日 リステラス星圏史略 (創作)

月光

~~未々の梢の上に大きくかかる満月。骨太い山女の腕がつかい棒をはずし、窓の戸をたてる。素板張りの山小屋の申、火の上になべがかかっている。~~

~~ミニタ「月光女神 (レリナルディアイム) きまが満月にのぼっていらっしやるだ。今夜~~

「これっ！ 嬢ちゃま！」

見つけた！ マシカは首をすくめ舌を出して、忍び足でいた戸口からぴょんと駆け出しました。

月夜の森の奥で娘が一人舞っておりました。いえ、踊っているのは娘ではありません。まだまだ幼い子供が一人、月光の夜の森を、舞いを踏むような足どりで、軽やかに駆け抜けて行くのでありました。

月光を一杯にうけてさえざえと弾いて、普通は真っ直ぐな楡の木がここでは少うし沼の側に傾いて、枝々を張り伸すような姿でそびえ立っていました。

そのせいなのかも知れません。懐剣を置いて心が崩折れた時、マシカはごうごうと音をたてて夢の中へとさらいこまれていきました。

そうして幾晩も幾晩も、永遠の夜が続いたかのように思われましたけれども、定かではありません。

ごうごうと苦しい夢は逆まき流れて行きました。マシカは祈りました。ただ願っていました。...どうか。どうかこの嘆きがよく癒されてくれますようにと。あまりにもそのままではそれでは

哀しすぎるのでした。少女の頬から、ひとつぶふたつづ、透明な光をはらんだ涙が、エルフエリの握った手の上に落ちました。

「森の花（マーイアラフ）」。

かすかに呼ぶような声が静寂になれたマシカの耳をうちました。

「居たのか、そこに。」

「ええ。」

誰かの言葉が少女の声を通して語られていました。

「居ますわ、ここに。わたしのフェル。」

彼と、誰であったものか、彼らは、静かにみつめあっていました。熱も、荒い呼吸（いき）も、もう彼を苦しめはしませんでした。

そしてある朝ミニタは見たのです。さしこむ朝の光の中の神聖な二人。不思議な戦士は安らかに横たわり、少女が、祈りの姿勢の枕元につっぷしたまま、~~幸福な微笑、その手をしかと握りしめたまま枕辺で幸福に眠りこんでいる姿を。~~

・ 鉄砲玉のエピ没!!

・ やっぱ現実味（リアリティ）を追いすぎても
真の空想（ファンタジー）には近づけない！

・ ミニタ（=現実）を
どの程度 描くか？

・ フェルはマシカに
どの程度 話すか？

2 山百合と銀の楡 1. ミアティネア地方 (高校1年?)

2 山百合と銀の楡 1. ミアティネア地方 (高校1年?)

2016年4月1日 リステラス星圏史略 (創作)

2

☆山百合と銀の楡

1. ミアティネア地方は(聖)皇(美)白都から旅して1年半の距離にある。近頃皇都附近で恐慌をもってささやかれ、伝えられている噂、あるいは事実は、まだ伝えられていなかった。ただ不安な空気が6年前の天変地異("大異変"?)以来いや増しになってゆくばかりである。(※)

2. 山の少女マシカ、素性不明の孤児で、おばばのあとを継いだ村の薬師である。自由奔放な性格で常人とは異なる。

ある秋の夜、森の薬師小屋から沼(星ヶ沼、星統べる沼、統べる星ヶ沼)へ泳ぎに出、(マ・バルナのエピソード入れる)満月の星空に傷付きながら飛ぶ飛仙の姿を見つける。(飛仙についての説明は?)

鬼王群の出没する彼方にふらふら行こうとした挙句、呼び止められて沼に落ちた飛仙を、連れ帰り看病する。

3. 看病中、マシカは不思議な幻覚を見た。
城が燃え、"彼"はあせりながら空を駆けっている。

☆ ダレムアスの中原に続く沿海18州

ゆきあたり村

道はじまり村

道の果ての村

[『マシカについて』 \(@高校かな?\)](#)

2006年7月19日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#) [コメント \(1\)](#)

マ・シカ、"お星さん"の意。飛仙(エルフエリ)フェルラダルから サユライ(=仙族語。山百合)の名をもらい、普段はマシカドリーシャ(星の娘)で通している。

血統がはっきりしないため、正式に名乗る時にも"星の娘サユライ"のみで、いずれにせよダレムアトとしては非常に珍しい姓名である。(サユライには野の星の異称もある)。

輪廻してサキになる魂である事は既決の通りだが、性格は本質的にはひねてないままに育った場合のサキであり、その名の示す通り かげりを持たないままでより深遠なるものに近づく事のできる

資質を持つ。物腰態度はごく大らかで愛らしく、姫と言うよりはむしろ"永遠の少女"であり、地球の血統による不屈の毅さと大地の民の明るい楽天氣質が見事に調和している。

サキと違って素直に他人に頼るので、その本来の精神力とあいまって非常に大きな力を持っている。ただしダレムアスにおいては超能力という形では発現せず、魔法使いや不思議人たちのような能力でもなくて、ただ本人も気づかない"運の強さ"や精霊たちからの自主的な援助、勘の鋭さ等として表れている。意識的に魔法を使う事にかけては、残念ながらいたってお粗末な成績しかあげていない。

蛇足ですが唐代の長安の宮のひとつに飛仙宮というやつがありました。

地図4 (高校?)

[地図4](#)

2015年12月9日 [リステラス星圏史略](#) (創作)



『山百合と銀の楡』舞台図。

フェルラダル（中2？）と、マシカの家？（専門学校頃？）

フェルラダル（中2？）と、マシカの家？（専門学校頃？）

2016年2月12日 リステラス星圏史略（創作）



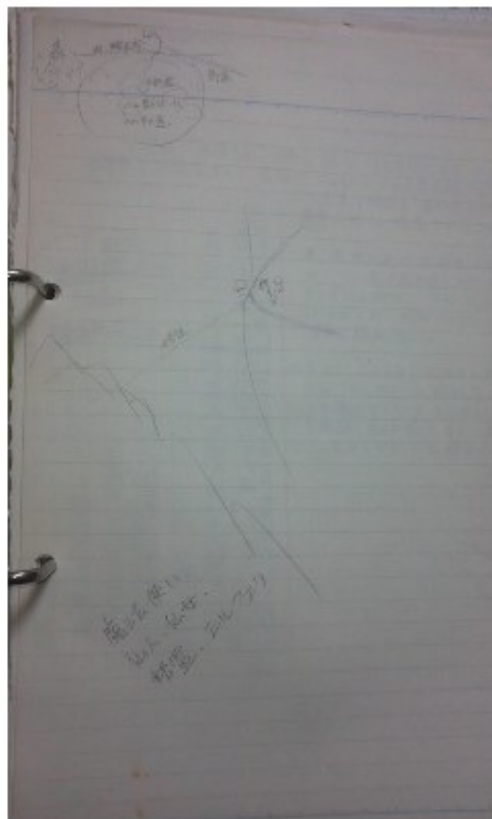


『 (中学2年ぐらい?の、メモ書き2件) 』

2006年7月19日 連載 (2周目・大地世界物語)

白都と大地の民との関り、
白都（皇宮）の情景、
道果て位置、文化レベル、
楽士の説明、と村の位置
マシカの生い立ち、
精族と人間との関り。
ルマルウンのかけらの
実際の効用

ボルドムの説明（起源等）



村

満月亭 街道

旧

街

道

星ヶ沼・村

山の中の道

魔法使い

仙人、仙女、

精霊、エルフエリ

著作権無視！（ハルマゲドン明美くんが描いてくれたキャラ設定。）

著作権無視！（^^;）！

2016年2月12日 リステラス星圏史略（創作）





無謀にも、予算も労力も知らないままに、

「アニメ化しよう！」とか...www

ユメを騙っていた時期（10代！）に、

ハルマゲドン明美くんが描いてくれたキャラ設定。www

マシカ、

フェルラダル、

フェルラダルとマリシアル。

（...マリシアルの設定が、私の描いた絵と全く違っちゃってるのは、何故だ??）

2006年7月19日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

「 リーシェン セイウヰラ -(兄妹)- フェル=マシカ
| グアヒ | | ↑
| マライアヌ 皇
? ティアス

- 神代 4世界神 (ルマルウン悲話)
- 前代 セイラの降嫁
- 現在 フェル、マシカ
マリシアル、マーライシャ
鬼王 (<重要!!) ステロタイプ悪役or
被差別民族の長?

「わかたれた血筋を戻してはなりません。
それはただの郷愁にすぎないから」

『フェルの話』（@1995.11.08.以前、なのは確か。）

[『リクエスト?のあったフェルに一ちゃんの話』（@1995.11.08.以前、なのは確か。）](#)

2006年7月20日 [連載（2周目・大地世界物語）](#)

大地世界。ダレムアス。ダイレムアースとかディレマスとか“誰夢明日”（たれかあすをゆめみん）とか、言語によって色々な呼ばれ方はしている。上古代に4柱の兄弟姉妹神によって創られた隣接する4世界（当初は亜空間。のち、時空震の影響で通常空間に次元落ちした）のうちの1つで、妹であるマライアヌ女神（ディアドライム）（別称は慈母の夢マリアンドリーム）の主導によって創造された。彼女を補佐した神々が主だった者だけで9柱？あり、生物層や社会体制については立憲君主制というか、合議制に近い設定だった。

この点で、主導神のほとんど独断で造営された、姉神リーシェソルトの天球界（エルシャムリア）、兄神グアヒギルグの地洞界（ボルドガスドム）、弟神ティアスラルの地球界（ティカーセラス）とは、一線を画している。4界の下位の神々や住人たちは当初は平和裡に往来していたが、主神同士のあいだに諫かいが生じるに及んで次第に疎遠になり、接点（次元通路）を残して国使のみの訪問となり、やがて戦乱の時代を経て街道は完全に封印され、互いに伝説の彼方へと忘れ去ることになった。

この主神たちの諫かいについては、兄神がみずからの民をたわむれに造りまた殺すのを楽しみとしたこと、弟神が創界なかばにして飽きてしまい生物層を混乱のままに放置したこと、この2点を姉神が厳しく非難したことを、主な要因とする。兄神は長姉であるリーシェソルトに邪恋を抱いてもおり、うるさい口を黙らせついでに我がものにせんとして、異形の民を創造して軍を編成し、天球界に攻め込むに及んだ。安寧きわまりない学究都市であった天球界の民の大半は消滅し、姉神リーシェソルトはこれにより界の閉鎖を宣言し、結界を築いて休眠してしまう。これより4界は3界となり、互いにバラバラな歴史を築くこととなった。

兄姉あるいは弟妹（ていまい）またはごく親しい者への一方的な恋慕は、この4界に繰り返し現れる一種のカルマである。大地世界の女神マライアヌは被造物であるはずの民の一人との恋に陥り、自ら定めた法（寿命の差がありすぎる異族間での婚姻を結んだ者は、短命な側の死とともに帰天（ゲームオーバー）しなければならないという始源の法定が大地世界にはある）を遵守せんがために、人族の命数に殉じて歴史のなかばにして帰天したが、その物語には当初の許婚者と見なされていた男神（副神）（パートナー）が、女神の悲嘆を愁えるあまり、恋敵である人間の男をかばって先に落命したという逸話もある。

主神・副神の2柱をともに予想外に早く失った大地世界は、その後、女神と人間の男とのあいだに生まれた半神女マリステアの子孫（皇族）を統治者として、長くゆるやかな歴史をつむぐことと

なる。

創造なかばにして主神を失った大地世界は物理法則？の長である大地の女神が生物種の後見をも兼ねることとなったが、自然界の精霊らを統治する存在である大地母神は人界の歴史に介入することは殆どなかった。ダレムアスの界（大地）はいまだ成長期にあり拡大を続けており、人族の築いた集落や都邑どうしが次第に遠距離に散らばっていくに従って、神都に住まう皇族の統治は及び難いものになり、また、4界争乱時の移民（難民）である異族らはそれぞれの王を仰ぐことを好んだ為に、大地の民としての一体感は失われていく。

やがて「遠方に離れた民を見捨てるのか」と、神都皇族の怠慢に憤った皇子の一人が西方の砂漠地帯に西（モルナス）皇朝を築き、その心情に同調する国々と、神都の権威を無視する行為と憤った都市群との間で戦闘（とは言え大地世界のそれは“こぜりあい”程度）が起こった。ダレムアス唯一の内乱時代である。数世代の混乱を経て、神都皇族は全土の統治に都合のよい平野部への遷都を決意し、街道沿いの沃野に聖美白都（ルア・マルライン）を築く。西（モルナス）皇族は白都（マルライン）皇族の権威を預かる存在と定義づけられ、西方の民のよりどころとなる。皇族同士の根に残った反感をやわらげる為に、いずれ双方の皇族からふさわしい許婚者を出して、分かれた血族を再び統一するものという約束を残して……。

飛仙の一族はもともと天球界（エルシャマーリャ）の住人であり、争乱の衝撃にも帰天することなく耐え、女神リーシェンソルトに殉じて眠りにつくことも安楽としなかった、天球人としては異色の根性すわった人々の子孫である。とは言えダレムアスや地球の一般人から見ればはるかに思索的で穏やかで高尚な連中である。

地球へ移住した同族たちは“精霊”（ファミコンで言うハイエルフの方。『指輪物語』では森の精霊（シルヴァンエルフ）とも）“神仙”などとも呼ばれ、また南米大陸では「海の向こうに去った白い神々」の伝承のもとともなった。

日本と呼ばれる島国に争乱時代より前に移民（婿入り？）した者たちの末は善野（おおの）に子孫を残し、白鳥天宮（しらとりてんぐう）（白色天狗）の名で祖神として奉られている。余談だがダレムアス（皇女戦記）シリーズの主要キャラである“地球人”翼 雄輝（つばさ・ゆうき）はこの直系の当主一族の最後の生き残りであった。

大地世界においては北東部の広大な森林地帯を占有？しており、大地の民の崇敬を受けてはいるが、あまり人界に関わることはない、謎の存在でもある。

東西皇朝の分裂の混乱が修復されてから数世代。白都皇朝に、ある暢気（のんき）な皇太子が生まれ、若い頃に見聞修行？と称して大地世界のかなり広い範囲を単身旅行した（それ自体はべ

つに珍しいことではない)。旅のついでに表敬訪問した飛仙の森で一族の長の娘でありフェルラダルの最愛(溺愛)の妹でもあるマリスシアラルル姫に一目惚れして、種族と寿命の違いも省みず、その場でプロポーズしてしまい、なんと一発でOKもらって嫁さんに連れて帰ってしまった。この後、仙界では彼女のことを「人間に嫁いで逆縁の不孝(親の寿命より10分の1ぐらいで早死)をする」という意味で、「我らを悲しませた娘」(セイウィラ・ノリウィラウアマ)の名で呼ばれることになる。(人界での略称は女皇(めのきみ)セイラである)

以降、未練たらたら兄君フェルラダルは婿いびり?を兼ねて妹の顔を見るために白都(マルライン)に入り浸るようになった。俗界を離れた仙族のくせに.....ヒンシュクなんである 妹によく似た姪のマーライシャは猫可愛がりするが、婿似の甥であるマリシアルの方は、同性でもあるので、どうもイジメて遊んでいたような気が.....(仲が悪いわけではない)

この辺のホームコメディはさておいて、みなそれぞれ大地世界に対して責任のある身である。長らく封印されたまま所在地すら定かではなくなっていた異界通路がこじ開けられて洞地界の鬼どもが攻め入って来るぞ.....という予言がなされ、統治者たちは大パニックとなる。なにしろ千年かけて百人ほどが“戦死”したぐらいの内乱しか経験がない上に、それをまた深く反省しちゃってスポーツとしての武芸すら下火になっていた時代である。どーっしろと言うんだーっ!という叫びは誰もが持ったが、そこで動揺しては女神の末である皇族の名がすたる。最善の道を模索して打てる限りの手は打つことになる。その一貫として、口約束のまま何代もお流れになっていた白都・西皇族間の婚姻を行って全土の結束感を強めておかなければ.....というので、白の皇女マーライシャと西の皇子クアロスの婚約が整えられた。妹を溺愛する体質?を伯父から受け継いだ?皇子マリシアルは、連れて逃げようかとまで苦悩するが、責任感の強い妹自身に一蹴されるし彼自身なにより皇太子としての自覚はあるので、マーライシャは少女の身で西方はるかに輿入れすることになる。(入れ替わりに西の末皇子マデイラが人質?として白都に来る約束だった)

皇女の行列が白都を出発したその日の夕刻、かつての所在地が判明せずに封印の強化がなされていなかった最後の異次元通路が、実は白都のすぐ近郊にあったという報告があり.....燃え上がる城下を見おろした皇たちは呟いた。「もう遅い.....」。(ちなみに、この白都通路の4つ辻の1つが地球の善野(おおの)に通じており、後に地球勢力の侵攻の拠点となった)

この上は西方勢力と合流して再起を図った方が良うございます.....と諫める重臣たちを蹴散らして白の都に単身(同行していたフェルに一ちゃんは、妹かわいさで後見人の責任放り出して一人で先に飛んでってしまった★)騎乗で戻ったマーライシャが、やはり近郊の出先から駆け戻った後、父母皇から「後を頼む」と言われて再び蹴り出されて来たマリシアルと再会を果たして、二人で東方に逃げ伸びた.....その後の話が、『大地世界物語・皇女戦記編』で、きみの言うところのダレムアス・シリーズなんである。

空を飛んで妹夫妻であり至上の主君でもある大地の男女皇を助けに戻ったフェルラダルは、妹に対して、再び空を飛んで（嫁いでのち重り兼用の装身具をつけて大地の民として地上でのみ暮らしていた）逃げれば良いではないか！と説得するが、すでに命数のついた男皇のからだを抱いたまま、「女神ですらそのために殉じられましたのに、たかが飛仙の身で掟が破れましようか？」と微笑み返されてしまい為すすべもなく、皇子と皇女を頼みますと言われたあげく飛仙の次期族長としての責任まで説かれてしまい（そこまで言われないと妹と心中する覚悟で動かなかったフェルさんもなー...★）結局、炎上する白都から最後に逃げ落ちた。

ひとまず故郷である仙族の森に帰ろうか、それとも皇子と皇女を探すのが先か.....と迷ううちに追撃軍から弾傷を負い、方向を誤って大地の背骨（ミアティネア）（山脈）地方の山人（ミアト）の国に迷い込み、墜落して山娘マシカに一命を救われた.....（実は死にたかったので大きなお世話だったかも）のが、『宝玉物語』のイントロとなっている。

望みをかなえる宝玉である“女神ルマウルンのかけら”は通常は飛仙の女性たちが代々受け継ぐものであり、形見としてセイラ妃から預けられていただけなので、本来なら飛仙の森に戻るかマーライシャに渡すかするのが筋だったのでは.....と思うが、当時のフェルさんに理性を期待してはいけない。おかげでキャラと話が増えてしまった.....

捨て子である星の娘（マ・シカ）の出生の秘密は作者もまだ知らない。謎のままで捨て置いても構わないエピソードなのかも知れない。言動（発想）のパターンからすると地球界系の血筋を引いているのは確かであるが.....（いま気がついたが母親かも知れない候補キャラが一人いる.....。フェルラダルと出会って自分の不思議さを自覚し、マリシアルと恋をしてそれを失った後、マーライシャの到来を待つて共に故郷を後にする。その後しばらく自分自身の謎を探す旅をするが、世界の動乱を目のあたりにしてはそんなことどーでもよくなってしまい、皇女と再会した後は侍女がわりや影武者のまねごとなどして重要な役割を果たす。

マーライシャとその腹心である鋭（リレキス）それぞれの内心を知る親友でもあった。戦乱の集結後、初恋の相手であるフェルラダルを口説き落として？結婚したようである。その後の暮らしぶりや子孫の有無や、宝玉の行方については、作者もいまだ知らない。

『 (無題) 』 (@派遣中orヒキコモリ中?)

『 (無題) 』 (@派遣中orヒキコモリ中?)

2006年7月20日 [連載 \(2周目・大地世界物語\) コメント \(1\)](#)

みちの涯（はて）の村というのは名のとおり草深き街道の涯てるに在りて、両の懸崖に深山の星花群れ咲く木の下闇に挟まれながら、山人（ミアト）の者でも二日、慣れぬ者なら三晩の野宿を経た後に、ようよう辿りつこうかという人跡稀な地の小なる僻村である。

深山の星花（みやまのほしはな）＝ シャガ

花見草（はなみぐさ）＝ うちの庭のピンクのやつ（桃色月見草）。

（マシカの上半身図。シャーペン＋色鉛筆描き、あり。）



ダレムアスだ... 2013年8月25日

[ダレムアスだ...](#)

2013年8月25日 [リステラス星圏史略](#) (創作) [コメント \(1\)](#)



[天の鈿女の命の鯉の鳥女の... \(違っ](#)

2015年6月13日 [リステラス星圏史略](#) (創作) [コメント \(1\)](#)

霧木里守≡畑楽希有 (はたら句きあり)

2015年6月12日10:21

メモ。

飛仙族の使用言語はつまびらかに伝えられていないため、

大地皇に降嫁した仙王女セイラが、その兄フェルラダルの協力を得て大地の白都民のために編纂翻訳した底本をテキストとした。

<http://76519.diarynote.jp/200607200031570000/>

>飛仙の一族はもともと天球界（エルシャマーリヤ）の住人であり、争乱の衝撃にも帰天することなく耐え、女神リーシェンソルトに殉じて眠りにつくことも安楽としなかった、天球人としては異色の根性すわった人々の子孫である。とは言えダレムアスや地球の一般人から見ればはるかに思索的で穏やかで高尚な連中である。

>地球へ移住した同族たちは“精霊”（ハイエルフ。『指輪物語』では森の精霊（シルヴァンエルフ）とも）“神仙”などとも呼ばれ、また南米大陸では「海の向こうに去った白い神々」の伝承のもととなった。

>日本と呼ばれる島国に争乱時代より前に移民（婿入り？）した者たちの末は善野（おおの）に子孫を残し、白鳥天宮（しらとりてんぐう）（白色天狗）の名で祖神として奉られている。

>余談だがダレムアス（皇女戦記）シリーズの主要キャラである“地球人”翼 雄輝（つばさ・ゆうき）（このナマエ変えようか一★）はこの直系の当主一族の最後の生き残りであった。

>大地世界においては北東部の広大な森林地帯を占有？しており、大地の民の崇敬を受けてはいるが、あまり人界に関わることはない、謎の存在でもある。

霧木里守≡畑楽希有 (はたら句きあり)

2015年6月12日16:22

互選王の終身親政制。

文化レベルはむしろ知水学派に負ける？

めも。星ヶ沼、マシカ、ティクタース泥球界人領。 (2016年3月30日)

[めも。星ヶ沼、マシカ、ティクタース泥球界人領。](#)

2016年3月30日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(1\)](#)

マシカ、星ヶ沼、
ティクタース大火（戦乱？）
薬師（メディスンマン、ワイズウーマン）
戦災孤児の里子あっせん。

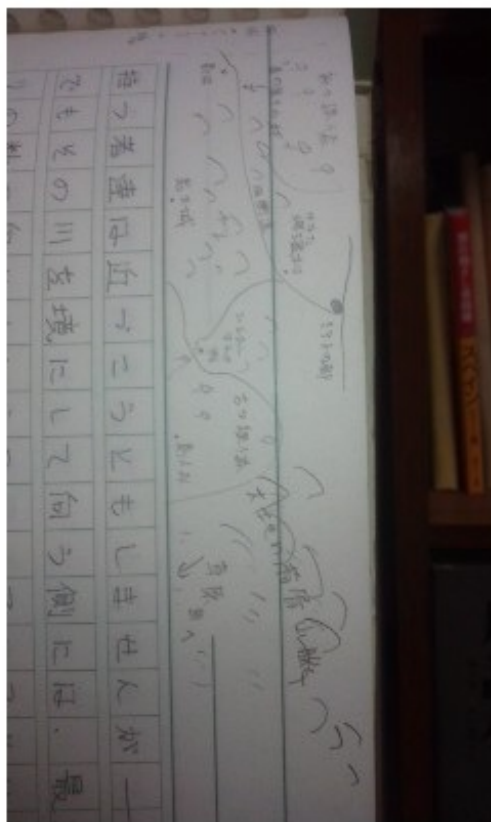
あとでね。

地図発見☆ (高校?)

[地図発見☆](#)

2016年4月1日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

携帯写真じゃ小さくなりすぎて、よく判らないですね...★



栗鼠熊

熊栗鼠 (くまりす / マボナンマンボ) ⇒ N a N a ちゃんに設定やってほしい。

ダレムアスの、神々の領域たる"大地の背骨"山脈の（最初期型？）（たぶん中1～2。）

[（最初期型？）（たぶん中1～2。）](#)

2016年2月26日 [リステラス星圏史略](#)（創作）

ダレムアスの、神々の領域たる"大地の背骨"山脈の、東はずれに溶け合っていて、入り組んだ地形の古つ緑ヶ森小連山。その奥ふところ、余人の足を踏み入れるを許されない聖域との境界にほとんど喰い込むようにしている"道の行きあたりの村"鈴谷郷に、一人のとても年老いた魔法使い...村人たちからおばばとか**ばばさ**と呼ばれている...が住んでいました。婆は、おおかたの魔法使いたちがそうであるように、ある時ふもとからの道をふらりとやって来て、なにゆえにこんな辺鄙な地が気に入ったものかそのまま居ついてしまっているそうなのですが、何年ほど前の事か（これもおおかたの魔法使いたちの習いに違わず）不意に姿を消したと思うと、数月して一人の赤児を連れて戻って来たのです。幼女は名をマ・シカ（お星さん）と云うばかりで、どこの誰の娘とも、それともおばばの孫かひまごでもあるものか、村人たちには何ひとつとして見当もつきませんでした。が、小さな華奢な体に癒えたばかりの幾つもの傷跡を見つけ、激しく夜泣きするのをあやす度に老魔法使いの目に浮かぶ深い慈悲の光を見るに及んで、素朴で誠実な山の民たちは何も尋かずにこの娘を受け入れる事を決めたのです。たとえ...幾人かの勤のよい者が人知れず感じたように...いずれ凶運を招く事になろうとも、です。おばばの手厚いひ護と村人たちの愛情に守られて、いつしか娘は闇に怖える事もなくなり、すくすくと素直に成長してゆきました。

その子供がある程度大きく、家の手伝いなども...おばばの家には近郷の村から手伝いの**ねえ**やが来てはいましたが...少しづつできるようになってきた頃、おばばは村の魔法使いと言うよりは薬師の長といった

※ 朽ち葉色...鮮やかな赤味かった黄色。

「月の美しい晩でした。」 (中2?)

「月の美しい晩でした。」 (中2?)

2016年2月18日 リステラス星圏史略 (創作)

月の美しい晩でした。いつものようにねえやの作る、つつましい夕食を食べ、今日摘んで来た分の薬草の分類を終えてしまうと...いつものように、窓からマシカは裏庭へと抜け出しました。風一つない、ごくごく静かな山奥の夕辺です。

一体なんだったか窓から抜け出したりなどするのかと言えばアルマ...ねえやの名です...がマシカの習慣にいつもいい顔をしないからで、彼女に言わせれば灯(ひ)ともし刻(とき)を過ぎた後で外を「うろつく」などと言うのは「とんでもない」事。

まして秋も深まり始めようというこの時期になってマシカのように水に「つかりに」行くのは...まあ、確かに、「気違いのやる」真似ではあるのです。

足音を立てないように、葉ずれの音を立てないように、抜き足さし足で猫の額(ひたい)程の菜園を通りぬけ、家の脇の木立ちを迂回します...と、そこからは完全にマシカ一人の世界。はや気の早い紅葉がいくらか散りしいている小径をたどりながら、夜露の冷たささえ気にもかけずに、山の奥へ奥へと、踊りはねるように登って行きました。

~~森の少女マシカ、この時わずかに三十六歳。古つ森地方一帯の風習でようやく「学び始め」の年を過ぎたばかりの、ほんのやせっぽちな少女でした。それを三年前、村の薬師でもあった物知りのおぼばが最後の巡礼に旅出って以来の事です。その職をついだマシカは、夏から秋の終りにかけてはこの山奥で草を集め、冬には村へ降りて乾燥やら調合やらの春の出荷の準備と、~~

月の銀と宵闇が織りなす、小径の上の不可思議な透かし模様。自分の細い手足をも不思議色に染めわけて、あちらへ跳び、こちらへはね、マシカは巧みに光と影の中へ溶けこんで行きます。

急な坂を登り切り、径の角を曲がると...

樹々の梢越しに、輝かしき月女神(レリナルディ)を映し出して、一つの大きい沼が目の前に横たわっていました。

~~星ヶ沼。古くから村では呼び習わされ、代々の長老・薬師達以外にはその所在を知らされない伝説の聖域。純粋な鏡のように陽光・月光をはじいてしまうこの沼が、ただ星々をだけ黙して受け入れているのは何故なのでしょう。まばゆいばかりの水面のさらにずっと奥深くに、たゆたっている見慣れた星座の影を見つ~~

マシカは慣れた足どりで、沼の中ほどにまで枝を張り出しているナムルの巨木に近づき、よじ登ります。そうしていつもの場所いつもの枝に、何の気もなくひょいと腰を降ろすと、無造作に両の靴を脱ぎ捨てて、何年もやり続けて来たように幹の洞（うろ）の中へけり込んだのでした。

ただいつもと違っていた事には、その晩の満月はあまりにも美しかったのです。普段なら瞬間も無く、服を脱ぎ捨てるなり泳ぎ始めている筈のマシカが、今日ばかりはしばし上着のひもを解くのさえ忘れて、水面の月と、その奥に沈んでいる星の影とに見入っていました。

と、その時です。足の下、水の淵、星々よりもさらに遠い、深い深い水宇宙の彼方を、弱弱しく光りながら横切っていくものをマシカは見つけました。

（何...？）

ほとんどころげ落ちんばかりに、体を乗り出してマシカは見つめました。何故かマシカ自身の姿は水の中に映らないのですが、一つ事に心を奪われていて気づく余裕がありません。

（人？ そう、人影みただけど...）

瞳を凝らす間にも、それは力無くただよいながら、マシカの足下を通過して行きます。

「エルフエリ！ そっちへ行っちゃダメ！」

突嗟に空を見上げて、マシカはそう叫んでいました。

『翼持たずして天空（あま）駆ける者』＝エルフエリ。

マシカが少しばかり仙族語（ソーラルロック）をかじっていたのが幸いしたのです。単語だけとは言え彼ら自身の言葉で呼びかけられたのでなければ、力の限界を越えて半ば以上気力で漂っていただけの飛仙（エルフエリ）の気を引く事ができたかどうか

——瞬、我に帰った彼は、眼下に広がる沼をそれと悟る間もなしに、遂に力つきて落ちて行ってしまったのでした。

「しっかり！ しっかりして、...エルフエリ！」

——服をも脱がずに飛び込んで彼が落ちた葦群（あしむら）まで泳いで来たマシカは、——目その仙族（ソーラ）の状態を見てぞっとしました。美しい四肢はすすと火傷とで見るかげもなく、仙族の象徴でもある身の丈よりも長い髪さえ焼け焦げて肩のあたりまでしかありません。腕と脇腹には折れた矢が突き刺さったまま、肩口からざっくりと刃の跡が口を開けています。

——本当に、——体どこでこうまでひどい傷を受けたものなのか、まだ生きて、空を駆けて来られたという事は奇跡としか思えない程の重態でした。

——マシカは自分の衣を引き裂いて、出来る限りしっかりと肩の傷口を抑えつけました。それ位の事で止められる出血の量ではありませんが、無いよりはましです。濡れた肌着一枚で秋も半ばの森の中に居て、しかしマシカは寒さよりも恐ろしさと悲しきの為に震えていました。

~~—どうしたらいいのか、わからないのです。この人は誰？— 一体どこでこんな傷を受けたの？—
この大地世界（ダレムアス）の誰が— 一体、— こうまでひどく仙族...申でも最高の尊敬を受けている
エルフエリの— 族...を傷つけられると言うのでしょうか。それから、ようやくはっと気づいて、マ
シカはエルフエリの体を抱え上げようとしました。家へ連れて帰って— 一刻も早く傷の手当てをし
なければ、— と気づいたのです。~~

~~—ところが—~~

~~—マシカは危うく悲鳴をあげてしまう所でした—~~

~~—軽いのです。エルフエリの体が—~~

~~—身の丈豊かな、マシカの倍以上もありそうなすばらしい体躯の持ち主です。マシカは、もし—
大で無理なようならば、— 一度家へ戻ってねえやを呼んで来なければと思っていたのです。それが
、まるで空気にさえ浮かびそうに楽々と抱え上げられてしまいました...—~~

~~—空を行く鳥でさえ眠る時には翼を休めるのに、仙族、ことにエルフエリの（申でもとりわけ天
大（エルシャマーリヤ）の血を濃くとどめる）貴人達の申には、死ねば孤空へ帰って行く者もあ
るのだ、と、不思議な話を聞かされた時の事を思い出します。では、ではこのエルフエリは、死
んでしまったのでしょうか？~~

~~—ポロポロ涙をこぼしている事にも気がつかないで、エルフエリを背負ったマシカは急ぎ足で山
を降って行きました。ただ、その時、エルフエリが身に帯びていた弓や剣や背のうが、あまり手
足にからまって邪魔になるもので、マシカだけの秘密の樹の洞（うろ）の申へ、大急ぎで放り込
んでおいたのです。~~



ようでした。が...

かろうじて向きを変えようとはしたのでしょうか。中空で不自然に体をひねったと見るや、バランスを崩した飛仙は... (マシカはまるで悪夢にでも魅入られた気がしました) ...まさかさまに落ちて来てしまったのです。

(沼の向こう岸！)

落下地点に見当をつけるなり、美事な弧を描いてマシカは水に飛び込んでいました。

(なんで？ どうして？ どこで！)

鬼たちの矢を心配するまでもなく、既にエルフエリは深傷を負っているようなのです。青白い長衣が血に染まってかなりひどく出血してしまっているようでした。

後で気がついたのですが、この時マシカは沼のこちら側から対岸まで、一呼吸もせずに泳ぎ切ってしまったのです。無我夢中で固い土の上に体を押し上げると、すぐ脇の入り江の葦群の中にその人は倒れていました。

マシカは悲鳴を上げようと思ったのです。声を出すことが出来ればどんなにか楽だったことか

。

すらりとした長身、鍛え抜かれた四肢。人間の基準に当てはめるなら、成人というよりむしろ

青年と云う言葉がしっくりくるような、奇妙に若々しい印象の美しい男性でした。

それなのに引きしまった肌は全身すすと火傷に覆われて見る影もなく、仙族の貴人の象徴であると言われる身の丈よりも長い髪でさえ、焼け焦げてちぢれて肩にも及びません。両腕と右の脇腹には折れた矢が突き立ったまま。肩口からざっくりと刀傷が口を開け、白く鈍い光を放っているのは骨が見えてしまっているのです。

まだ、生きて、空を駆けて来られた事自体が奇跡としか言い様のない状態でした。

[山百合と銀の楡 下稿 \(高校?\)](#)

2016年3月25日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

大地世界 (ダレムアス) シリーズ

・ 宝玉物語 ・

"山百合と銀の楡" 下稿

広く平らかな"大地"の世界ダレムアス。王侯・領主や諸族長達を統べる皇 (おう) と女皇 (めのきみ) とのおわします、平原の都ルア・マルラインからは遠く隔たって、ここミアティネア地方のミアトの国の南半分は深く大地の背骨山脈にと入り込んでいました。

その、"背骨"の内懐へと這い入って続く細い街道の終りに小さな山人達の集落があります。そこから先はもう禁断の神域"マドリアウィ山塊"というあたりです。人々はそこを『道の果ての村』と呼ぶのでした。

悪い噂もまだこのような山奥の村へまでは届いていませんでした。ただ不穏な空気、落ちつけぬ、熱病のように四囲をおおって行く良くない予感、とでも言ったものだけが、出々の間を村人達の間を支配していたのでした。

とは言え谷をうがつ清流や険しい丘陵を覆う森の樹々から、大地母神の恵みが失われたという訳ではありません。むしろ彼の6年前の大異変以来、精霊達がやけをでも起こしたのではと逆に不安気に囁かれる程です。理由も無く、豊猟の年が続いていました。

秋の事とて村人は皆こぞって山に入ります。背負籠 (しよいこ) を担ぎ、ある者は茸や木の実を、そしてより多くの者は香りも高い薬草の数々を求めて歩くのでした。

神域に近いミアティネアの緑ヶ森では、同じ種類でも他の地方に数倍する薬効の草が得られるというので、定評があるのでした。

摘まれた草々は干したり束ねたりして秋の終り雪の積もる前に、夏に獲られた毛皮や鹿干肉等と共に送られて行きます。冬の始まりに荷駄を届けた若衆が、麦や水稻の実や、異国織りの布などを持ち帰って来れば、山には本格的な春が訪れているのでした。

普通に使われる傷薬 (マイアテラス) やテンネレ草 (毒消し) の根であれば山人の誰もが採りに行きました。けれど『道の果ての村』には代々一人薬師と呼ばれる者がいて、最も神域に近い山にまでわけ入って見分けの難しい

そのなかでも際立って神域に近い森の奥深くまで分け入って行くのは、村でただ一人薬師 (くすし) と呼ばれる者にだけ許された役割でした。

選りわけの難しい稀少な薬種を集め、精製するのが薬師の仕事です。その為に、毎年夏の終り

から秋にかけて、薬師小屋、という山の中の一軒家に移り住むのが、古来からのしきたりとなっていました。

月光女神（レリナルディアイム）の満月に妖しく美しく輝やき渡る晩でしたので、姉やは早々に窓の戸をたててしまっていました。

「今晚こそは絶対に外に出ちゃなんねえだぞ嬢ちゃま。どだい夜ちうのは精霊族んためのもんで、人間が用もなしにのこのこ邪魔しに出掛けていいもんではねえんだ。」

「...だってあたし汗かいたわ、ミニタ」

「今、風呂をたててるだよ」

「こーんないい晩に、家の中で？」

小うるさい姉やが戸口の側からどいた瞬間に、捕えられていた仔鹿のように身軽に少女は走り出して行きました。

「これっ！嬢ちゃま!!」

後にはただほがらかな笑い声だけが森の奥へと駆けこんでいきます。

[...本来業務～... \(?\)](#)

2016年3月11日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

宝玉物語Ⅰ

山百合と銀の楡

遠野真谷人

さあ、みんな、お布団にはいりましたか？

お話をはじめますよ！

月の美しい晩でした。

マシカは、夜ふけにそっと身を起こして、となりの台所の気配をうかがいました。

カタカタと火の番をしながら夜なべ仕事をしている小さな音が聞こえます。ねえやのアルマは今頃はマシカはもうぐっすりと眠ったものと思っているのでしょうか。

ぬきあし、さしあし。

マシカはそおっと寝台からすべりおりて窓べに近づきました。戸板を上におしあけて突っかい棒でおさえるようになっている窓わくの金具には、こういう時のために音がしないよう、きちんと油が塗ってありました。

すとん、と夜の庭におりたちます。

満月が深い森の木々のこずえにかかっておりました。

最後にもういちど台所の方へふりかえります。だいじょうぶ、気づかれたようすはありません。

さあ！ 自由です。

マシカは森のなかへとかけだして行きました。

右へ行って、左へまわって、木の枝にとびついて、岩のあいだを飛んで。

おどるように気まぐれに道もない夜の森をはしりぬけます。

ほんの赤ちゃんのころから夏のあいだを毎年すごしてきたところです。

宝玉物語 Ⅰ

山百合と銀の楡

遠野真谷人

さあ、みんな、お布団にはいりましたか？

お話をはじめますよ！

月の美しい晩でした。

マシカは、夜ふけにそっと身を起こして、となりの台所の気配をうかがいました。

カタカタと火の番をしながら夜なべ仕事をしている小さな音が聞こえます。ねえやのアルマは今頃はマシカはもうぐっすりと眠ったものと思っているのでしょう。

ぬきあし、さしあし。

マシカはそおっと寝台からすべりおりて窓べに近づきました。戸板を上におしあけて突っかい棒でおさえるようになっている窓わくの金具には、こういう時のために音がしないよう、きちんと油が塗ってありました。

すとん、と夜の庭におりたちます。

満月が深い森の木々のこずえにかかっておりました。

最後にもういちど台所の方へふりかえります。だいじょうぶ、気づかれたようすはありません。

さあ！ 自由です。

マシカは森のなかへとかけだして行きました。

右へ行って、左へまわって、木の枝にとびついて、岩のあいだを飛んで。

おどるように気まぐれに道もない夜の森をはしりぬけます。

ほんの赤ちゃんのころから夏のあいだを毎年すごしてきた所です。

「泳ぐだと！」（高校？）

「泳ぐだと！」（高校？）

2016年3月25日 リステラス星圏史略（創作）

月の美しい晩でした。

「嬢ちゃま、これっ！」

（...見つかった！）

戸口からそっと抜け出ようとしていたマシカは、首をすくめて慌てて走りだしました。

「今日摘んだ分の薬種の仕分けは終わったもの！ 汗もかいたし風も気持ちいいし、泳ぎに行かないって手はないじゃない！」

「泳ぐだと！」

明るい灯火の中に影を浮き立たせて姉やのミニタは怒鳴ります。

「もう長月も末にかかろうっちゃうに、これ！ 今と風呂を沸かしますだよ嬢ちゃま！」

「こんないい晩に、家の中で？」

聞かず、マシカは朗らかに笑いながら小暗い森の中にと駆け込んで行くのでした。

「泳ぐだと」

ミニタは繰り返すように呟いて、戸口を閉めました。夜なのです。先年亡くなった御婆様の後を継いで、マシカ嬢ちゃまは確かに村の薬師としては随分良くやっています。

しかし、夜なのです。

堅実なミニタには、どう考えても灯ともし刻（どき）を過ぎた後で神域近い森のさなかを『うろつく』のが、まっとうな事だとは思えませんでした。

その上に水に入ると言うのです。

いつもの事とはいえ、普通村人なら誰もが抱く"星ヶ沼"の不可思議さへの畏怖というものが、嬢ちゃまにはまるで持ち合わせないようなのでした。

つましい山郷風の夕食は胃にもたれたりということがありません。月の光を浴びて駆けだしたマシカは、森の中に飛び込みながら思いきり伸びをしました。

さあ！

マシカの自由な時間です。

樹々の間で一人、好きなだけ跳ねまわることができるのです。...

口に出してこそは言いませんが、まだまだ遊んでばかりいたい盛りに薬師という重責を受けたのは、大分負担にもなっているのです。

長月も末のこと、気の早いもみじ葉たちが散り敷きはじめているのを踏みしだいて、夜露の冷たささえ知らぬげにマシカは薄い上着一枚で奥へ奥へと山のなかを走って行きました。

風音ひとつとてない樹々たちのしじまです。月の銀と宵闇との織りなす不可思議な透かし模様
に溶け込みながら、あちらへ跳び、こちらへはね、やせっぽちの子供の脚がかもし出す韻律だ

けが、ただその静寂のなかへと吸い込まれて行くのでした。

急な斜面の木立ちを一息に登り切り、小高い崖から飛び降ります。野原を越え、昔の道標岩を走り越して獣道を横切ると、そこに...

一本の楡の巨木の梢越しに輝かな月女神（レリナルディ）の姿を映し出して、古い古い沼が静かに横たわっていました。

「楡の木さん（マ・バルナ）、今日も来ちゃった。」

幼い少女は無邪気に話しかけながら巨木に走り寄り、身軽くよじ登ります。

[没原稿・補遺。](#)

2016年3月17日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

大気を射抜くように煌々と十五夜の月があたりを照らしておりました。

もちろん見つければさぞかし絞られるに決まっています。道の果ての村からさらに一日歩いて登った高地の夜中、水浴などして風邪でもひいたらどうなるか…。

そういう理由もあるでしょう。それにもまして問題は、そこが星ヶ沼だ、というところにありました。

山百合と銀の楡

柗実真紅

月のたいそう美しい晩でした。いつものように夕飯を終え、今日の分の薬草の仕分けを済ませて、わくわくしながら大人しく、ふたりだけで住んでいるねえやの部屋の灯が消されるのを待つのです。

ぼうっと暗さが増しました。しばらく静かにすればもういいでしょう。マシカは裸足のまま木の窓を押しあけて、沼ネズミのように素早く音もなく裏庭の菜園をかけぬけました。

さあ、これで自由な時間です。

小屋のむこうですぐ下草に消えている細い山道をつつきって、ふだんは深い闇に閉ざされた森のなかも、満月の銀の光にまもられる今宵となれば別の世界にいるようです。

少女は思い切り伸びをしました。責任の重い仕事が、辛いということではないけれど、とにかく薬草摘みに精を出すこの季節には、昼間は遊ぶどころではありません。

この歳で、亡くなったお婆(ばば)の後を継いで薬師(くすし)という大役をつとめるのはなかなか気骨が折れました。

ねえやに見つければたっぷりしぼられますが。

こうして毎晩ぬけ出して泳ぎに行くのがマシカには一番楽しいことでした。

野原を越え、急な斜面の木立ちを一息に登りきり、小高い崖からトビおり滑りおり。

せせらぎに沿って岩場を乗りこえれば、そこには深く静かな闇色の水面が広がり…

ひともとの楡の大樹をすかして輝かな月女神の姿をうつしだす、古い古い沼がただ黙したまま穏やかに横たわっていました。

星ヶ沼。

土地の者はそう呼びます。

いろいろと、不思議な話の尽きない場所でありました。

人族とその神々の治める世界の一部というよりは、ぽっかりと、どこかの虚空へ開いた鏡。精霊たちの領域。

ふつうの村人たちは勿論、年ごとにこの山深い夏小屋で仕事する代々の薬師たちですら、畏れてみだりには近寄らないようにと語り伝えるものでしたが、なぜかマシカだけは畏怖する気も起きず、むしろほかのどこよりも心が真澄む気がして、こうして毎晩、通って来ているのです。

「榆の木さん（マ・バルナ）、来ちゃったわ！」

沼のなかほどに乗りだすようにそびえる榆（バルナ）の木は、月光を一杯にうけて冴えざえと輝いて、山一番の古老だとは思えないほど勢いよく枝葉を広げています。

太い幹を身軽によじのぼり、最も沼に突き出た大枝のいつもの特等席に腰をおろして少女はひと息つきました。

「マ・バルナ、今日はね、酷かったのよ…」

口の重い山女とふたりきりの半年間。マシカの勝手な独白に、さやさやと抜ける夜風に震えて梢はときおり笑って返事をするようです。

仔栗鼠が寝ぼけて顔を出し、チッと鳴く親の警告にすてんと幹から落ちかけて、あわてた少女の細い手に救われました。

さざ波ひとつない沼の面（おもて）がまあい満月の姿を完璧にはじいています。そのくせ星々の影はといえば沼の底よりも更に深く、見上げてみて手が届かないというのよりさえ遥かに遠く、小さな砂粒となって深奥に沈んでいるのです。

その鮮明な不可思議。

いつもは服を脱ぎ捨てるなり水に飛びこんでしまうマシカも、何故か今夜はふいと心を奪われて無心に見入っていました。

『 (無題) 』 (@専校?)

『 (無題) 』 (@専校?)

2006年7月19日 連載 (2周目・大地世界物語)

それゆえに昔語りを始めよう。

大地の国と呼ばれるダレムアス世界のひとすみに、山多き (ミアティネア) 地方の山人 (ミアト) の国というのがある。その山人 (ミアト) の国の都から、人の生きて入るあたわざる聖なる神々の土地、マドリアウイ連山の白雪の峰々の方へ向けて、宿場すらなき旧街道をほそぼそと旅すること二ヶ月 (ふたつき) あまり。そこにむかし、"道の果ての村" というのがあった。

そこから先にはもう獣の通う道しかない。始源の神の国 (マドリアウイ) 山のやまふところに、抱かれるようにしてある小さな村であった。

○

「お婆 (ばば) さまァ！」

(1985.3.23)

[『 \(1985.3.23\) 』](#)

2006年7月19日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

マシカが何処から来たのかはだあれも知らない。マシカも知らない。

マシカは ばばさに 拾われてこの村へ来た。まだ少しばかりは若かったばばさは、この "道の果ての村" で、薬師をつとめていた。

[\(草稿/仙女皇セイラの辞世の句。とフェルラダルの返歌?\)...だよな、たぶん... \(^_^;\) ...☆](#)
2016年3月3日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

「飛仙なんだわ!!」

「行っちゃう!行っちゃうわ。マ・バルナ!」
マシカの声はもうほとんど泣きそうでした。と、
丁度その時、まるでどこかよそから飛び込んででも来たように唐突に、もうせんに教わった昔語りの一つを思い出したのです。

「おねがいエルヲエリ!行かないで!」

エルヲエリというのは、「翼なくして天空(あま) 駆ける者」。仙族語で彼ら自身の事をさす言葉の一つで、エルヲエリ、とか、エルヲエリ、とも言うのでした。

飛仙は今度こそ少女の声に気づいた様子で...落ちて来てしまったのです!!

...まだ若い人のようでした。男の人です。緋衣と見えたものが、実は全て血の色なのです。全身が傷だらけです!...折れた矢がさきさまのまま、何本も突き立っています。たっ、と枝をけって、マシカは落ちて来た飛仙に飛びついていました。ザバン! 背中を打つ水面がまるで氷のよう、ショックで息が止まるようです。何か固い物が胸に当たり、思わず開けた口から水がなだれ込んで来ます。飛仙は気を失ったままなのではしょうか? 高い空から落ちて来たいきおいのままに、しがみついているマシカをもひきずって沈んで行くのです。

上は、空気のある所はどこ?!...

ザバン! 激しい水音がして、身動きひとつできないでいるうちにエルヲエリは飛仙はぐんぐん沈んで行きました。はっと気づいて後を追ったマシカも精一杯潜ってゆくのですが、なにぶん飛仙の方が倍近くも重いうえに、落ちて来た時の勢いがついてしまっていて、いってもいっても追いつく事ができないのです。十尋、二十尋、この沼はこんなにも深かったでしょうか? 更に奥へと暗い淵は続いています。この沼はこんなにも深かったでしょうか? マシカはこんなにも苦しい思いをしたのは初めてでした。それに、いったい飛仙はまだ気を失ったままでいるのか、それとも、もうとうに死んでしまっていて、仮にマシカが追いつけたとしても無駄な話なのかもしれません。馬鹿な真似をするな、と本能が頭の中で叫びましたが、それでもマシカは必死で潜って行くのでした。もう駄目だ...と思った一瞬、何も見えなくなった瞳の奥に、楡の木の姿が浮かびます。その時、最後にとさしのべた手が固いもののに当たり、必死でしがみつきのながらも、意識が遠のいて行くのは、どうしようもありませんでした。

いえ、ここはもう沼の中ではありませんでした。ごうごうと音をたてる炎のうず、熱に耐えかねて崩れ落ちる石の壁。どこか大きなお城。でなければ神殿の中に、マシカは今、立っているのです。

いつの間にかエルフエリの姿は消えています。炎との赤い舌の中を歩いていながら、マシカの体は燃えず、それどころかひどく寒いと覚えるのです。虚しい絶望感が心をおおう...一面の炎が喰い散らしているのは、ありとある希望と、幸福の面影。降りかかる巨石の柱がマシカに傷一つつける事がなかったので、マシカにも今、歩いているのは幻影の中なのだ、と、思考の停止しているマシカにも理解できました。

山百合と銀の楡

月の美しい晩でした。いつものようにつましい夕食を食べ、今日摘んで来た分の薬草の仕分けを終えてしまうと、今日もマシカは窓から裏庭へと抜け出しました。慣れた足どりで表へまわり、アルマの部屋の灯りがもう消えているのを確かめます。OK。忍び足で庭の菜園を通り抜け、小屋の先で下草の中に消えている小径をつきつて、さあ！マシカの自由な時間。森の中で一人思いっきり跳ねまわることができるのです。気の早いもみじ葉たちが散りしき始めているのを踏みしだいて、夜露の冷たささえ気にならぬげに、マシカは薄着一枚で奥へ奥へと山の中を走って行きました。

風音ひとつとてない樹々たちのしじまです。あちらへ跳び、こちらへはね、月の銀と宵闇との織りなす不可思議な透かし模様に入れ込みながら、やせっぽちの子供がかもしだす韻律だけがただその静寂の中に吸い込まれて行きます。そして急な斜面を登りきり、小高い崖をひとつとびに飛び降りると... 一本の楡の巨木の梢越しに輝かな月女神（レリナルディ）の姿を映しだして、古い古い沼が静かに横たわっていました。

「楡の木（マ・バルナ）さん、今日も来ちゃった。」

身軽によじ登りながら幼い少女はほがらかに話しかけます。沼の中ほどまで張りだした太い幹の上、枝ととの角度が手頃な腰掛けを提供してくれるあたりがマシカのいつもの特等席。ついでに唯一の肉親の膝としての役割をも毎日果たしてくれているのです。

「マ・バルナ、今日はねエ、わたしね...」

他愛もない一日の報告を話しながら柔らかい皮のはき物を器用に脱いで足元の洞（うろ）にけこみ、摘み草の恰好のまま着け放していた手甲や脚絆は空を切って向かいの大枝のくに飛び込みます。この大楡の樹には大小あわせて十幾つもの洞があって、りすや小鳥の巣になっているもの以外は全部マシカのもののなのです。

さざ波ひとつない沼の面（おもて）がまあるい満月の形を完璧にはじいています。そのくせ星々の影はと云えば沼の底よりさらに深く、見上げてみて手が届かないのよりもっとずっと奥の方に沈んでいるのです。いつもは何の気なしに見過ごして、服を脱ぎ捨てるなり水に飛び込んでしまうのが習慣のマシカも、今日は、ふっとその不可思議さに心を奪われて、上衣のひもをとくのも忘れて見入っていました。

と、その時です。足の下、沼の淵、星々よりもさらに遠い深い水宇宙の彼方を、弱々しい光を放ちながら漂っていくものがありました。

「マ・バルナ、あれはなあに？...」

思わず声に出してつぶやきながら、マシカはほとんどころげ落ちんばかりに身を乗り出しました。なぜだかマシカ自身の姿は水の中に映らないのですが、ひとつ事に心を奪われていて気づく余裕がありません。

「人？そう、人影みたいだけど...」

瞳をこらす間にもそれはマシカの足下を通り過ぎて行きます。

「仙族！飛仙なんだわ！そっちへ行っちゃダメ!!」

とっさに空を振り仰いでその正体に気づくなり、マシカは精一杯そう叫んでいました。

「そちはダメッ。鬼が出るの、危ないのよ。いきなり射られてしまうんだからっ！」

けれどその声が耳に届かないのか、それとも言葉が通じていないのでしょうか？ 放心したように漂って行く先には一筋の川があるのです。あまりに流れが冷たい上に古くから不思議な力があると伝えられて、悪い性質を持つ者たちは近づこうとはしません...それでもその川を域いにして向こう側には、近頃かなりの数の鬼たちがうろついているという事でした。現におととい、どうしても川向うでなければ摘めない香り草をとりに忍び込んで、マシカも、食べられもしない小鳥たちがたわむれに射殺される所を目にしてきたばかりであったのです。

「行っちゃう！行っちゃうわ。マ・バルナ！」

マシカの声はもう殆ど泣きそうでした。と、楡の木の名を呼んだちょうどその時、まるでよそから飛び込んでても来たように唐突に、もうせんに教わった昔語りの一つが頭にひらめいたのです。

「おねがい、エルフエリ。行かないで!!」

エルフエリというのは"翼なくして天空（あま）駆ける者"。仙族自身の言葉で、彼ら一族の貴人を呼ぶ語なのだそうです。"エルフエリ"とか"エルフィーリ"とも言うのだと、マシカは寝物語に聞いていました。

飛仙は、今度こそ童女の声に気づいた様子で、向きを変えようと振り向いたのです。が... 一体どうしたというのでしょうか?! 中空で不自然に体をひねったと見るや、バランスを崩した飛仙は、まさかさまに落ちて来てしまったのです!!

...マシカはまるで悪夢にでも魅入られてしまったようでした。コンナコワイコト、ホントウノハズナイワ。けれど現に目の前で起こっている事なのです。...まだ若い人のようでした。男の人です。緋衣と見たものが、実はすべて血に染っているのです。全身が傷だらけです!! ...折れた矢がささったまま、何本も体に突き立っています。

たっ、と枝をけて、マシカは落ちて行く飛仙にとびついていました。ザバン！背中を打つ水面がまるで氷のよう。ショックで息が止まるようです。何か固い物が胸にぶつかって、思わず開けた口から地獄がなだれ込んできます。

飛仙は気を失なったままなののでしょうか？ 高い空から落ちて来た勢いそのままに、しがみついているマシカをもひきずって沈んで行くのです。その太い腕にとりついて、マシカは必死でした。上は、空気のある所はどっち？ あの楡の木の太い幹の

ある方です。楡の木、マ・バルナ...！！

突然。マシカはひどく暖かいものに包まれていました。宝物でも護るよう、命あるものを愛しむよう、生まれたばかりの嬰兒（みどりご）を慈しむようにして、エルフエリの広い胸に抱（いだ）かれていたのです。飛仙は負傷のために発熱しているらしく、冷たい水の中であってなおその腕は火と燃えるようでした。

いえ、ここはもう沼の中ではありません。ごうごうとほえ叫ぶ一面の炎、熱に耐えかねて崩れおちる石の壁。毒矢に倒れ、こぼれた剣を手にしたまま、かつて兵士であったものたちが、松明のように焼けただれてあちこちころがっています。生き残りえた者は誰もいない、どこか大きな城...でなければ神殿の中に、今、マシカの心は迷いこんでいるのでした。

いつの間にかエルフエリの姿は消え、燃える世界にただ一人ぼっちです。床は火、柱も火。見上げれば天空までもが黒煙に厚く覆われて、幾百億の火の粉ばかりが、生きた星のように舞い狂っています。

気がつくと目の前にはエルフエリの穏やかな寝顔があり、マシカは注意深く包帯をとりかえおえたところでした。

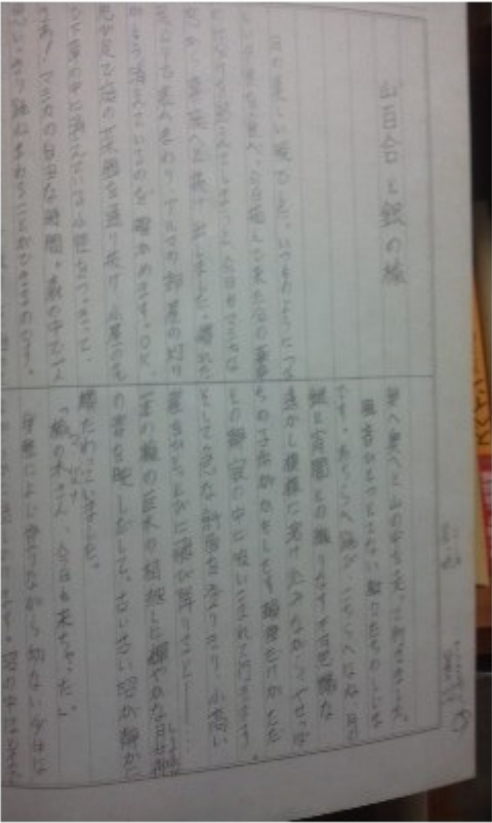
「え!？」 一瞬、前後の脈絡がのみこめずに彼の布団をかけ直す手をとめます。

「あたし...どうしたの？ たしか、沼に落ちて...」 そう、それから、何だか夢を見ていたような気がします。長い長い、とてつもなく長くて悲しい、複雑な夢。

「やんれやれ、まずは峠を越えてくれてよかっただね、嬢ちゃま」

星ッ娘（マ・シカ）

星ヶ沼（サーラムソルディナツラ）



(身の丈だけでも自分の倍はありそうな重いエルフエリを抱えて、) (中2。)

(りす@WORK)

2016年2月26日 リステラス星圏史略 (創作)

身の丈だけでも自分の倍はありそうな重いエルフエリを抱えて、一体どうやって山小舎までたどり着いたものか、不思議とマシカにも覚えがありません。とにかくふと気がついた時には全身ぐしょ濡れのまま部屋の中に居て、彼の治療をするより先にまず服を換えて来るよう言い張るねえやと口論している所でした。

「ダメなの、そんな暇ないんだってばっ！息してないし心臓もほとんど止まってるの。早く暖炉つけてお湯わかしてよォ」

おしりをぶたれてもめったに泣いた事のないマシカがぼろぼろ涙を流して頼むので、口うるさいねえやもそれ以上頑張る事ができなかったのです。心を決めてしまえば彼女の動きは速く、マシカがその細い体で精一杯エルフエリの息を吹き返させようとしているうちに勢いよく音たてて燃える炎が部屋の中を照らし始めます。

「嬢ちゃまの力じゃこんな大っきな人相手にすんの無理だよ。息吹きこむのはアルマが代るから、早く傷の手当しな」

言われて身を起こす時、マシカは世界が一回転するような感じがして背後の壁へぶっかかりました。「なんでもないの。大丈夫」かろうじてアルマの手を払って起き上がりはしますが、暖炉の火で明るい筈の室内が妙に暗くぼんやりして見えて、まるでからくり箱をのぞいているような異和感です。それも道理、マシカだってついさっきにはおぼれかけ、体力の限界を越えて重いエルフエリを運んで来たばかりなのです。

(母なる女神マリアニ、医薬を司どる知神ヨーリヤ)

ともすればかすみそうな頭の中で、少女は声にならない祈りを必死で唱えました。たとえ子供でも、先年死出での旅に立った曾祖母の後を継いで、今はマシカ自身が村の薬師の長なのです。今、もしこのエルフエリを救う事ができる人がいるとしたら、それはアルマでは駄目で、未熟ながらも自分の腕と知識に頼る他は手がないのです。

(...おばば！)

精一杯の祈りが聞き届けられたのか、少しは頭がはっきりして来て、息をするのもさっきほど苦しくはなくなりました。アルマが持って来てあった薬草袋の中味を手早く卓の上に並べると、貴重品のミアマセラスの葉をいつもの倍はとりわけて、炉でたぎっている熱い鉄鍋の湯の中に投げ入れます。

「地の葉(ダレラス)、王の葉(ミアマセラス)、大地の民(ダレマトイ・サレウナラ)の安らわし手なる葉(エオ・ミアラス)よ」

舌足らずな祈祷語を唱えるにつれて、えも言われぬ香気が部屋の中にたちこめます。ミアマセラスの葉には人の苦痛や疲労をいやし、快よくさせる強い働きがあるのです。

マシカは生き返ったように感じながら、手早く幾種類かの草や種を調合して傷薬と薬酒をこし

らえました。

「アルマ」

「はいよ、嬢ちゃま。こん人はなんとか息したようだよ」

肉づきのよい小女は顔は口移しで息を吹き込み続けていたもので真赤になっています。

「...ホント!?!」

マシカは一瞬信じられない、という気がして聞き返しました。

「心臓は？」

「大丈夫。こん人は丈夫そうだから、きっと助かるよ」

ミアマアセラスの効能とアルマの言葉にはげまされて、幼い薬師の長は何時間も働き続けました。一番大きな肩の刀傷から始めて順々に薬湯で洗い、痛み止めや可能止めに効くマイアテラスの広葉をあてて包帯をかけます。

矢傷には、もし万一毒矢が使われていれば恐ろしい事になるので、葉をくいしばって熱湯をそそぎ込み、既に変色してしまっている傷口には毒消しのテンネレの乾し草をさし込んで火をつけます。肉のこげる匂いがともすればミアマアセラスの芳香をおしのけそうになり、エルフエリがのたうっただけの力もなくして低く苦痛に呻るのをマシカは耳を抑えて耐えなければなりませんでした。

肩の脱臼と全身の火傷に擦過傷...これは今すぐにはどうにも手の打ちようがありません。

夜半過ぎまで続いたマシカの熱心な治療のおかげで、エルフエリは確かにそのまま持ち直すかのように見うけられました。心臓はゆっくりですが規則正しく鼓動し始め、もう人工呼吸の必要もないようです。アルマが時折り口にふくませる薬酒のおかげで、顔の色もわずかながら戻りつつありました。

が...

山の端に気の早い月が半ば沈みはじめた頃です。急に汗をかき始めたと思うと、エルフエリの体はたちまちのうちにひどく熱くなりました。慌てたアルマが何度も何度も川と小舎の間を往復するのですが、手拭いはその度にすぐ乾いてしまってもものの役に立ちません。

頬の肉がそれこそ目に見えそうな速さでこそげていくのを見守るうちに、マシカは彼の肌が変色しかけているのに気づいて、ぞっと背筋が粟立つように感じました。毒です。矢傷の手充てにどこか不完全な所があったに違いありません。恐ろしさに包帯同士がからむほど手指を震わせながら、少女は片端から傷を調べ直してゆきました。

「！」

妙です。この傷には確かに薬草で火をつけた筈なのに、どす黒い赤紫にふくれ上がった部分が一ヶ所、右脚のつけ根の近くにできていました。思わず触れてみるとむしろぐんなりと冷たくて、既に肉が腐ってしまっているのが解ります。それに...この奥の方にある、小さなしこりのような固いものは何なのでしょう？

「知神ヨーリャよ、その輩下なる精霊ミイアーマよ」

両手をあてて、神々に祈りながら、つとめて心を鎮めます。と、心の中に、彼の体をむしばんでいるものの正体が浮んで来ました。

小さな、無格好な鉄のかたまりです。その形は、丸いというよりむしろ底を平らに削ったどんぐりのような感じなのですが、マシカが思わず悲鳴を上げそうになったほど、それには邪悪な性質がこめられていました。

(...てつ・はう。)

確かに習った覚えがありました。木矢の代わりに鉄の玉をつがえて、どんな鳥よりも速く、どんな矢よりも遠く飛ばせる、棒のような型の奇妙な弓の事です。鬼人の世界ボルドマスや球の地びと達が住むティクターズ領邦国。そんな異国で使われる武器だということでした。

~~「よくお聞き、マシカ。あんたは昔、ティクターズの都に住んでいてな」~~
~~「昔、むかし。それこそ記憶にないくらいの昔の話でした。領邦国の内乱に巻きこまれてしまったのでしょ。既に息たえた母親に抱かれて川を下ってきた赤ん坊を~~

「アルマ！縄をちょうだい！」

音高く椅子をけたててマシカは立ち上がりました。懐剣を手荒らに引き抜いて暖炉の中心にかざします。薬湯の量は...と、大丈夫。大鍋いっぱいのお湯に、更に二束のミアマアセラスとマイアテラスの実ひと袋、少し考えてから、産ぶ湯を使う時に入れるイミテリスのくきを数本、新たに選りわけて投げ入れます。

「嬢ちゃま、どう...」

いつにないマシカの態度にうろたえながら、それでもおばばさまに仕えていた頃からの条件反射で言われたものを取って来たアルマが不安そうに尋ねました。炉に架けた剣はそろそろ深紅色に輝き始めています。

「切るの。そうしないとエルフエリが死んじゃうの。」

アルマへの説明というよりは自分自身の心へ言い聞かせるために、蒼白な顔で少女は素っ気なく言いました。

「その縄でエルフエリを寝台にくくりつけて？ それから、替えの敷布団と包帯をもっと...」

肉の焼ける匂いと、毒に汚された血液のおぞましい色彩。歯をくいしばったマシカの痩せっぽちな腕が情け容謝なくエルフエリの脚に刃をくいこませ、腐り変色した部分を

食用野草 九草 既 株
 12月
 ・セリ *Oenanthe stolonifera*
 十次 *Capsella Bursa-Past*
 利尿・解熱 又
 ・ハコバ *Stellaria media Cyr*
 産後、浄血、催乳
 (搾汁)は癌病に効
 薬食して首痛炎上
 ・モギ *Artemisia vulgaris L. var*
 葉裏の白毛・モギ
 煎用 = 収斂劑、重
 下痢 痲瘋
 ・クボボ *Taraxacum platycarpum*
 解熱 気平 浄血
 ・スギナ *Egubetum arvense L*
 利尿
 播毒
 至日
 ・9917 *Aralia elata Seem* 皮部
 ・794 *Clouedendron trichotomum*
 葉中の昆虫の幼虫は
 ・20057 *Lonicera japonica Thunb*

(未完)

いちばん驚ろかされたのは、やはり何と言ってもねえやのアルマでしょう。(中2?)

[\(たぶん中2の美術の教科書\)](#)

2016年2月26日 [リステラス星圏史略](#) (創作) [コメント](#) (1)

いちばん驚ろかされたのは、やはり何と言ってもねえやのアルマでしょう。気持ちの良い寝入り鼻にいきなり叩き起こされ...灯火が無いわけではなかったのですが、山の辺の民は皆早寝です...たかと思うと、部屋で大人しくしているはずの嬢ちゃまが下着一枚ずぶぬれの恰好で、見た事もない美しい戦士を運んできたのですから。ただ、さすが長年薬師の家で働いて来ただけあって、怪我人と見ればあれこれ根掘り葉掘り聞いたがって時間を潰すような真似はしないでくれました。

~~それこそマシカが慮っていたことだったので。~~

「ばばサの部屋ならすぐと火が入るよ嬢ちゃま。つい癖でいつも薪サそろえてたから。ほれ、ほくち。そん人こっち貸して、火つけたら部屋行って着かえてき。湯は湧かしとくったら、速く。嬢ちゃままで熱出したら、あたしゃこん人死なしちまうよ...あれ、軽い！嬢ちゃま、こん人もしかして...」

マシカは一秒だってエルフエリから目を離すのは恐ろしくてしかたが無かったので。頑として彼を寝かせた枕元から動かず、アルマが大量に薬湯を煮立て、必要になりそうな薬草一式、地下室から運び出して来るまでの間に、短刀を使ってエルフエリのズタズタになった衣を注意深く切り取りました。

ひどい傷です。月明りで見た時にはわからなかった無数の火傷が手足を埋め、パツクリと口を開けた傷口からはもう流れ出るだけの血も残っていないようなのです。しわの1つでも見つけられないものかと、追いつめられた眼でマシカは敷布団をながめわたしてみます。脈をとろうと持ち上げたたくましい腕にも、殆ど重さが感じられません。ただ1つの救いは、エルフエリの唇の上にかざした銀鏡が、わずかづつではありますが、規則正しく曇っている事でした。

まるで氷のようだった仙族の体は、明け方にかすかなぬくみを取り戻したと思うやいなや額の手拭いが湯気をたてる程になり、1週間近くもそのままの状態が続きました。

その間、彼はひっきりなしにうなされ続け、何か叫んでは必死に起き上がろうとしてました。

「森の花(マーイアラフ)!森の花(マーイアラフ)!」

「そんな事をしてはいけない!」

早口の仙族語の中からマシカに聞きわけられたのは、ただこの2つだけでした。

7日7晩、片時も離れずにマシカは彼を看取り続け、8日目の暁に、ハッと気がついた時には、エルフエリは嘘のように安らかな表情で眠りについていました。

始め、マシカはとうとう彼が命を燃やし尽くしてしまったのかと思ってぞっとしたのです。と、その時、昇る陽の最初の一筋が彼を照らし、疲れ果てたマシカの眼にくっきりと、敷布に刻まれた影が映りました。

「神さま！感謝します...」

細い手足の幼ない少女が、祈りの姿勢のまま、微笑みながら寝台に突っ伏して眠っている輝かしい朝の光の中で、エルフエリの力強い美しい腕が無意識のうちにさし伸べられて、少女の組んだ指を優しく覆っていた。...お人好しの平凡な山女のアルマが、ある朝起き出して来て、こんな神々しい光景を目にしたのでした。

~~「本当に、信じられない程ですね、エルフエリさま」~~

~~「夕刻まで同じ格好で眠り続け、確かに首と肩は凝ってしまったもののすっかり元気を回復して、上気したバラ色の頬でマシカは言いました。」~~

~~「きつき目を覚ました時にはまだ横になってらしたのに、あたしが着がえて体を洗ってくる間に、もう体を起こせるようになってるんですね」~~

~~「暖炉の薪が静かにはぜ、薄着一枚でいても気にならない暖たかきです。辺りを照らしている炎も寝台の帷（とぼり）の陰までは届きにくいのですが...そこはそれ、気をきかしたアルマが燭台を持ち出していました。」~~

~~「仙族が傷を負う事は滅多にないし、また一度（ひとたび）快方に向いさえすれば、その回復の速さには目覚ましいものがあるのですよ、我が恩人どの」~~

~~「食べ終えたかゆの椀を脇卓に戻して、まるで一人前の姫宮に接するかのよう~~に~~エルフエリは話しました。おかげで山娘はすっかり驚ろいた拳句に、あがってしまい、しおろもどろに「マシカ...です...」とつぶやくのがやっとの事でした。」~~

~~「なんといっても、」~~

それから数日の間、山あいの薬師小屋には静寂と平和さだけが残されてありました。アルマはエルフエリのために使いきってしまった分を補充しに、毎日しょいこを背負って一人で草摘みに出かけて行きます。その代わりにと彼女の分の夜なべ仕事も引き受けて、マシカは終日エルフエリのそばから動こうともしませんでした。ありったけの小箱に小袋、はては小布などまで持ち出して、

エルフエリは時折りふっと目を覚ましては枕辺にある少女の姿を見て微笑み、それで安心するのか再び穏やかな眠りの淵へと沈みます。谷のぐるりには何とはなしに白いもやがかかっているようで、ぽかんと蒼い秋空の光が薄れるかわり、何故か保護されているような安心感を中にいるものに与えるのでした。

時折り頃合いを見計らっては彼の口元にスープを運んでいる

(未完)

夜半過ぎ...秋の月も山の端に沈みかかろうという頃 (高校?)

[夜半過ぎ...秋の月も山の端に沈みかかろうという頃 \(高校?\)](#)

2016年4月1日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

夜半過ぎ...秋の月も山の端に沈みかかろうという頃です。マシカは低く悲鳴をおさえながら、それでも恐怖に打たれて飛びのくように、飛仙（エルフエリ）の上からどかなければなりませんでした。

「知神ヨーリャよ、その配下なる精霊ミィアーマよ！」

...先程から急に彼は汗をかき始め、またたく間に普通人間では考えられない程の高熱を発してはいましたが、それだけならばまあ必ずしもひどく悪い状態だとは言えませんでした。少なくともこのまま冷え切って眠るように逝かれてしまうよりは、体が生き延びる為に闘い始めたという証（あかし）なのですから。

そうではなく、小さな大地の国民（ダレムアト）を怯え切らせたのは、奇妙に深い傷の奥に隠された、禍々しい程に邪悪な気配を持つあるものの為でした。

「何...なんあのこれは。この大地世界（ダレムアス）に何が起こったというの?!」

「嬢ちゃま? どうしただ」

もともとがマシカは回転（まわり）が大変に早いませた子供で、その上に薬師としての修業をはじめて以来、先代のおば様でさえがしばしば驚いた程に、診療の際の心の眼の鋭さ、感受力の豊かさといったものを身につけつつありました。

神視力

「嬢ちゃま？ 嬢ちゃまどうしただ？」 （専門学校？）

補遺 2.

2016年3月17日 リステラス星圏史略 （創作）

「嬢ちゃま？ 嬢ちゃまどうしただ？」

荒々しく肩を押さえられて瞳を開けるとミニタの顔がありました。薬師の家での台所勤めの長い彼女は知っていたのです。死界に旅出ちかけた者を看取る時、薬師の魂はともすれば肉体を離れ出てしまいがちだということ。

「あ、なんでもない...大丈夫』

ミニタへの説明というよりは自分自身の心に言い聞かせるために、蒼白な顔で少女は素っ気なく言い切りました。懐剣を手荒に引き抜いて暖炉の中心にかざします。薬湯の量を確認して、更に二束のミアマアセラとマイアテラスの実を一袋。少し考えこみながら普通は産ぶ湯を使う時に入れるインミテリスの茎を数本、新たに選り分けて投げ入れました。

おばばならこんな時、焼いた刃物など使わずに2本の腕と心の力だけで悪いものを取り除くことができたかも知れません。けれどマシカには年季というものがあまりにも足りなさ過ぎました。それを知っていました。今は、...

肉の焼けつく臭いと、毒に犯された血液のおぞましい色彩。歯を喰いしばったマシカの瘦せた幼い腕が情け容赦なくエルフエリの脚に刃を喰い込ませ、どす黒い

「熱にうかされてエルフエリは」 (中2?)

「熱にうかされてエルフエリは」 (中2?)

2016年2月18日 リステラス星圏史略 (創作)

「マーイアラフ！ マーイアラフ！」

熱にうかされてエルフエリは時折り耳馴れない言葉を口走りました。たいていは定かに聞きとることすらできぬ多音節な飛仙族の言葉でしたけれども、ただひとつだけ、もっともしばしばくりかえされる誰かの名前らしい美しい響きだけは、不思議なほどはっきりとマシカの耳を打ったのでした。

ところでマシカはその間中、エルフエリの心に自分自身を近く寄せていました。

そのせいだったのかもしれませんが。ふと気がつくとき少女は渦をまく苦しいにがい夢のさなかについて、ひとつの情景...エルフエリの心が繰り返し繰り返し追いつけている...を共に眺めているのでした。

補遺 2.

2016年3月17日 リステラス星圏史略（創作）

轟々と闇の彼方より襲ってきた炎が、すべてを滅ぼし喰らい尽してゆきます...

「嬢ちゃま？ 嬢ちゃまどうしただ？」

荒々しく肩を押さえられて瞳を開けると、そこには人の好いミニタのまるまるした心配顔がのぞきこんでいるのです。

「あ、...なんでもない、大丈夫。」

強く星紫色に輝いている瞳をしばたたいて、とうに体力の限界を過ぎている筈のマシカはそれでも決然と体を起こし、立ち上がりました。

「ミニタ。縄を頂戴。この人を寝台にしっかりくくりつけて。」

薬師というのは他者（ひと）の命を預かる役目です。子供ながらも指図をしなければならぬ者の声で、マシカはそう言い切りました。

「浄ちゃま？ どう...」

「切るの。腐った肉をどけちゃわないと、死んじゃうのよ。」

ミニタへの説明というよりは自分自身の心に確っかりと聞かせる為に、蒼白な顔で少女は素っ気なく言い切りました。懐剣を手荒に引き抜いて暖炉の中心にかざします。薬湯の量を確認して、更に何種類もの葉の束を、無造作に投げ入れていきました。

肉の焼けつく臭いと、毒に犯された血液のおぞましい色彩。弱り切った飛仙はもはやもがく力すらなくて、低くもらすうめきを、耳を塞いで耐え、歯を喰いしばったマシカの幼い細い腕が情け容赦なくエルフエリの体に刃をねじこませていきます。

どす黒く血肉にまぶれた鉛玉が、やがて出てくるのです。

「ミニタ、そこのテンネレの葉をちょうだい。」

山女は言います。マシカが始終しゃんとして、指示をしたり薬種を調合したり、し続けていた...と。それから幾日もの間、エルフエリの熱が下がるまでずっと。

ミニタはそう言い張るのですが当のマシカには全てが漠として、鉛玉を取り出してからあとの事はなにひとつ覚えていられないのです。

そうして幾晩も幾晩も、永遠の夜が続いたかのように思われましたけれども、定かではありません。

柔らかい手の皮が灼ける程に熱い懐剣を持つうちに、何かが再びちらちらと心の内部に見えてくるような気持でした。

マシカはその間中ずっとエルフエリの心に自分自身を近く寄せていたのです。彼の苦痛を己れの側に引き入れる事で少しでも和らげる為です。

マシカはいつでも、誰に教えられた訳でもないのに、診療の度にそうして来ました。おば様でさえ確かには気がついていなかった事ですが、村人達の間ではマシカの手当は"丁寧で"痛みが少ないという評判でした。

けれどよくトゲを抜いたりなどしてやっている、より精霊族に近い魂を持つ森の動物達が、滅多には見られない程に熱心に懐くのも、そういった普通ならぬ不可思議な力を少女が持つ故だったのかも知れません。

ともあれ切り裂かれるエルフエリがこの上もない痛みにさいなまれねばならない間、二人の心は懸命に継ぎ合わされて、それを分けあっていたのです。ひどい油汗をしたたらせながらマシカは刃を置きました。

共有している形をともなわない苦悩のせい、その瞳は一時に五十年も百年も年をとってしまったかに見えるほど、深い表情をたたえて孤空を見つめています。

そこに居てミニタに薬湯の量を指示したりもしながら、心はひきずられてどこか他所にあって、エルフエリが繰り返し繰り返し追いつけているひとつの情景を、見つめているのです。

ごうごうと苦しい幻は逆まき流れて行きました。(高校?)

2016年4月1日 リステラス星圏史略 (創作)

ごうごうと苦しい幻は逆まき流れて行きました。マシカは祈りました。ただ願っていました。...どうか。どうかこの嘆きがよく癒されてくれますようにと。このままではあまりにもそれは哀しすぎるのです。少女の頬からひとつぶふたつ、透明な光をはらんだ涙が握り合わせたエルフエリの手の上に落ちかかりました。

「森の花（マーイアラフ）。」

かすかに呼ぶ声が静寂に馴じんだマシカの耳をうちました。

「居たのか、そこに。」

まだ見たことのない海のように濃い色合いの瞳が、ぼんやりと、けれど真向にマシカを捉えていました。その瞬間、少女はその場に存るのが自分達だけではないということをはっきりと悟りました。

「ええ。」

限りなく優しく、誰かがマシカの声を通して微笑みかえます。

「居ますわ。ここに。わたしの兄様（フェル）。」

彼と、はたして誰であったものか...と、彼達は静かに見つめあっていました。エルフエリの薄くあけられた眼には通常の言葉ならぬ耀やかな星の瞬きが宿り、マシカ自身でもあった貴女の姿もおそらく同じような光に包まれていたのでしょう。

静かでした。とても。穏やかに2人はなっていました。やがてふうっとエルフエリは再び瞳を閉じました。

「やすらかにおやすみなさいませ。どうぞ...おすこやかに...」

熱も、荒い呼吸も、もう彼を苦しめることはありませんでした。そうしてある朝、ひとの好いミニタは見たのです。さしこむ朝の陽ざしのなかの神聖な三人。不思議な戦士はやすらいで横たわり、少女が、その手をしかと握りしめたまま枕辺で幸福に眠りこんでいる...神々の手になる一幅の絵のように、神聖で輝かしい二人を。

夜の森の中を、少女が駆けている。（専門学校？）

補遺 2.

2016年3月17日 リステラス星圏史略（創作）

少女。

夜の森の中を、少女が駆けている。

その娘は、走って来るにつれてどんどん大人の顔になってゆく。何事かを喜ばしげに叫びながら...あるいは、彼の名を呼んでいるのかもしれない...その、"彼"のもとへ、真っ直ぐに、ひたむきに、一本の矢のようにやって来ようとしているのだった。

炎があった。

春の、緑の陽ざしが通り過ぎた。

長い長い、人生という名の、道程...

戦乱の終わりに娘が彼に追いついた時。

少女は、たぐいまれな一人の美姫、気高き女騎士（ルワ・ブラダ）へと...

成長をとげていた。

(非⇒公開1) / 『山百合と銀の楡』 by 紅実真紅。

[\(非⇒公開1\) / 『山百合と銀の楡』 by 紅実真紅。](#)

2016年3月11日 [リステラス星圏史略](#) (創作) [コメント\(2\)](#)

=====

(2016.03.25.出しました)

山百合と銀の楡

紅実真紅

月のたいそう美しい晩でした。

大気を射抜くように煌々と十五夜の月があたりを照らしておりました。いつものように今日摘んだ薬草の仕分けを済ませ、わくわくしながら何喰わぬ顔をつくろって、ふたりだけですんでいるねえやの部屋の灯かりがで部屋にひきあげます。

ぼうっと灯がゆれてあたりの暗さが増しました。

さあ、これで自由な時間です。マシカは裸足のまま木の窓を押しあけて、沼ネズミのように素速く音もなく裏庭の菜園をかけぬけました。

ただ一軒の小屋のむこうですぐ下草に消えている細い山道をつきつて、ふだんは深い闇に閉ざされた森のなかも、満月の銀の力にまもられる今宵となれば冴えざえと、晃々とした明るさは別世界にいるようです。

野原を越え、急な斜面の木立を一息に登りきり、せせらぎにそって岩場を乗り越えれば、深く静かな夜半の水面。ひともとの楡(バルナ)の大樹をすかして月女神の姿をうつしだす、太古からのその泉の名を星ヶ沼といいました。

「楡の木(マ・バルナ)さん、来ちゃったわ！」

少女はそう宣言して太い幹を身軽によじのぼり、沼の上まではりだした大枝の、いつもの特等席に腰をおちつけます。ふわわ、と思いきり伸びをする、それはまだ若い乙女というよりは無垢な子供の仕草でありました。

「ねえ今日はねえ。聞いてちょうだい、マ・バルナ...」

上衣のひもを解きながらのマシカの勝手な独白に、ときおりの夜風にふかれる梢のささやきはまるで笑って返事をするようです。

この歳で、亡くなったお婆(ばば)さまのあとを継いで薬師(くすし)という大役をつとめるのはなかなか気骨が折れました。責任の重い仕事が辛いというのではないけれど、とにかく薬草摘みに精を出す夏の半年は山奥の小屋にこもりきり、遊ぶどころか話をするのもいつもねえやがいるだけです。だからこうして泳ぎにくるのがマシカが一番好きでした。

「それでね楡の木...」

その時くらりと傾くような気がしてマシカは言葉をとぎらせました。

秋の初めのすだきわたる虫の音がふいっと消されたようで、痛いほどの夜の沈黙のなか、さざ波ひとつない沼の面がまあい月の姿を完璧にはじいています。そのくせ星々の影は沼の底よりさらにも深く、遠く小さな砂粒と化して水宇宙のかなたに沈んでいるのです。

人族とその神々の治めるこの世の一部というよりは、ぽっかりと、どこかの虚空へひらいた鏡。精霊たちの領域。

枝から垂らした足の下沼の淵の、月女神のむこう、星々よりは近いどこかを、弱弱しい光を放ちながら漂っていくものがありました。

白々として神さびしい、かすかに銀青を帯びた輝きです。

「マ・バルナ、あれはなあに...？」

落ちんばかりに覗きこむ、少女の姿をは映していない水鏡。

「人？ そう、人影みただけど」

瞳をこらすあいだにもそれはゆらゆらと眼下を通過してゆきます。

背の高い髪の高い、男のひと、それも戦士であるようでした。

「仙族！」

小さな叫びをあげました。

どうして彼がそうだと直ぐに理解できたのかわかりません。とにかくマシカは驚いて、咄嗟に頭上をふりあおぎ、影の主人を探していました。

沼をかこむ森の樹々のこずえのはるか冲天を、いいつたえの仙の一族のなかでもとりわけ尊いとされている、飛仙がひとり過ぎてゆくのです。

「そっちへ行っちゃ駄目！」

方角を見定めてマシカは慌てて叫びました。

「そっちは駄目よっ鬼が出るの！いきなり射られてしまうんだからっ!!」

けれどもその声は遠くて届かないのでしょうか。なにか、様子が普通でない気がします。

ゆくてには一筋の川がありました。

あまりに流れが冷たいいうえにその源は神峰マドリアウィに発するとも言われ、古くから、悪い性質をもつ者たちは渡ろうとはしませんが、それでもその川を境にして向こう側には昔からかなりの数の鬼どもが住んでいるという事でした。

現にマシカもさきおとついで、どうしても要る薬効キノコを探しに行つて危ない思いをしたばかり。知らずに飛仙が撃ち落とされたらと思ひ描いて、マシカはぞくっとしました。

「行っちゃう！行っちゃうわ。マ・バルナ！」

少女の声はもうほとんど泣きそうに、知らずしらず親代わりの古い古木にしがみついていた。と、もうせんに教わった昔がたりのお婆の声が脳裏にひらめいて出たのです。

「お願い、エルフエリ。行かないで!!」

どんな種族でも真（まこと）の名、自ら称じる名前には特別な力と意味がこもります。そうしてエルフエリというのは、“天駆ける者”。仙族の言葉でかれらの貴人を呼ぶ語です。

今度こそ、飛仙は少女の叫びに気がついたようでした。が...

ふりむこうとしたその一瞬、中空で不自然にからだをひねったと見るや、釣り合いを崩した飛ぶ者はまっさかさまに墜ちてしまったのです！

まだ若い男の人のようです。はじめ緋色の星衣とみたものは、紅く血に染まった白銀の鎧姿なのです。全身が傷だらけです...折れた矢が何本か突き立ったまま、ずたぼろになった外被をからだに縫いとめています。

...マシカはまるで悪夢を見るふうで、悲鳴を声にする暇もありませんでした。

けれど未熟とはいえマシカは薬師（くすし）です。怪我を負った村人たちを救ってきたのはいつも自分の判断でした。

「神さま！」

たっと枝をけて飛仙の体を抱きとめ、水面へ突っする衝撃をわずかでも減らそうと自らを楯にして背中から落ちました。

激痛に息がつまり、思わずあけた口から地獄のように波がなだれこんで来ます。空の高みから落下した飛仙の重さそのままに、潰れたマシカの肺がギチギチときしみます。

沈む速さは想像もつかないほどでした。

(...助けて！)

太い腕を抱えてマシカはもがきました。

(上は、空気のある方はどっち!?)

それは楡の木のあるほうです。楡の木、にれのき、マ・バルナ...！

突然。マシカはひどく熱いものに包まれていました。

(エルフエリ！)

そうです。気を失ったままの飛仙がまるで無意識に、己が半身を守ろうとするように広い胸にしっかりと少女を抱きしめていたのです。

飛仙は怪我と疲労のために発熱しているらしく、冷たい水の中であってなおその腕は火と燃えるようでした。

いえ、もうここは沼中ではありません。最後の飛仙の力でしょうか、光る空気の球を帯び、二人はゆっくりと昇りつつ岸边を目指していました。

どうやって岸边に出たのか覚えもありません。

肺にとびこんだ水が出ようとして喉笛がひゅうひゅう鳴ります。わずかの間、気絶していたマシカは飛び起きるなり吐き気に襲われました。

くらくらします。死にかけていたのです。けれどもそんなことに構っている暇はありませんでした。

「なんてこと！」

息を、呑みました。その仙族は蒼冷めて、月の下、すでに命はないものとも思われました。

すらりとした長身の鍛えぬかれた体躯です。人の十倍生きるという飛仙にふさわしく彫りの深

い顔立ちはまだ十分若いと同時に経てきた歳月をうかがわせるものでした。笑えばさぞかし深くひびく穏やかな人柄でしょう。それなのに引きしまった肌は体中、すすと血のりに被われて見るかげもなく、仙族の貴人に独特の風体だと聞いた、身の丈よりも長く美しい髪さえ千切れ焼け焦げて肩のあたりで乱れるばかりです。

右の脇腹や手足には折れた矢が突き立ったまま。肩はぱっくりと斧の傷が口をあげ、鈍い白色に光るのは骨がのぞけておりました。

まだ、生きて、空を駆けて来られたことが奇跡とおもえる重傷でした。ただひとつの幸いと言えばそれこそ、墜落で息の根をとめられずに済んだという一事だけでしょう。

(でも、水だって全然飲んでない！)

無理矢理そう数えることでマシカは恐慌と戦いました。

(なにより怖いのは薬師自身がもうだめだと思う時...)

お婆の教えの声だけです。まだ生命のあるあいだ、脈のかすかにある相手には、どんなにしても必ず救ってみせると言えと。

(でも、なんで。どうして、どこで、誰が?!)

飛仙に刃をむけるなど、これはまるで合戦でもあったようです。取り乱し叫びだせたらどんなにか楽だったでしょう。理由もわからない怖ろしさと哀しみでなにひとつ考えられもしません。

ただ薬師としての修練だけでマシカは自分の上衣を引き裂き、震える指で出来る限りしっかりと飛仙の肩の傷口を縛りました。

"飛ぶ者"というだけあって見た目より驚くほど軽いとはいえマシカの倍はありそうな長身なのです。いったいどうやって山小屋までたどりつけたものか。とにかくふと気がつくときぐしょぬれの下着姿のまま、たたき起こしたねえやと短く争っている最中でした。

「まず嬢ちゃまの着替えが先だ」

ねえやは言うのです。

「あれほど夜に出歩くなぞとんでもねえ言うたのに、しかもこの季節に泳いで！」

「駄目なの、そんなひま無いんだってばっ」

冷えきっているのはマシカよりも飛仙のほうです。わからずやのねえやに傷の重さを説明しているうちに涙がぼろぼろ出てきて止まらなくなりそうでした。

「ばかぁ、ミニタ。早く。はやくったら暖炉つけてお湯わかしてきてよお...」

ところで乳母の姪でもあるねえやが少女の涙を見たのといえは婆サの葬式のときだけです。あまり苦しそうに流れ落ちるそれに、ようやくまだ少し寝ぼけていた山女も事態を悟ったようでした。

「婆サの部屋ならすぐと火がはいるよ嬢ちゃま。つい癖で薪さ揃えておいただからね」

長年薬師に仕えていただけあって、動きだせば手早い心強い味方です。長いこと使っていなかった寝台にふたりがかりでエルフエリの長身をよこたえて、懐剣を抜いたマシカが彼のぼろぼろの戦衣を切りとるあいだにも、ひやりと薄暗かった部屋にはあるだけの灯火が灯されて黄色く手元を照らしはじめ、ついで炉の火が明々と、少女と飛仙をささえるかのように燃えあがったのです。

(しっかりして、エルフエリ！)

手早く大きな傷口から順に止血をしていきながら、唇の上にかざした錫鏡がわずかづつ、それでも確かに曇ってくるのを見て涙をぐいと拭きました。

「ミニタ、どう思う」

「大丈夫、きっと救かるとも」

(地母神さま、月女神さま、どうか...)

用意された薬草を手早く卓の上に並べます。一夏がかりで採取した貴重なセラスの葉を枝ごと、いつもの倍はとりわけて、炉にかけた熱い薬鍋の湯のなかに投じます。

「地の葉、皇（おう）の葉、大地の民の癒しのもとなる聖なる神の葉（ミア・マ・アセラス）よ...」

先ほど溺れかけたばかりでマシカ自身なかば凍えていたのでしょう。もつれかける舌の根で最初の祈りの言葉をなげかけるとふわっと部屋中に樹木と果実の混ざったような芳純な香りがひろがって、それですこし治療者のほうも唇の色がもどるようです。

その湯をくみわけて更に幾種もの葉や実の粉を混ぜ合わせ、薬酒にして口移しで飛仙の喉に流し込みました。

(非⇒公開 2) / 『山百合と銀の楡』 by 紅実真紅。

(非⇒公開 2) / 『山百合と銀の楡』 by 紅実真紅。

2016年3月17日 リステラス星圏史略 (創作)

=====

(2016.03.25.出しました。)

夜半過ぎまでの熱心な治療のおかげで飛仙は本当にもちなおすかとも思われました。けれど満月が山の端になかば沈みはじめた頃にです。急に汗をかきはじめたと思う間に飛仙の体はひどい高熱に侵されていました。

驚いたミニタが何度も辛抱強く小川と小屋のあいだを往復して冷たい水を汲んではくりますが、額においた手拭いはそのたび直ぐに乾いてしまってももの役にも立ちません。

ただおろおろと見守るうちに、ふとマシカは彼の肌色がふつうでなくどす黒くかわろうとしているのに気づいてぞっと背筋を粟立てました。

毒、です。

矢傷のどれかに毒が仕込んであったに違いありません。

(...誰が!)

その考えのあまりの恐ろしさに目もくらむほど、ひとを、武器で傷つけるというのでさえ薬師にとっては許せないことなのに、わざわざ毒まで塗って...

涙を落とす余裕もなく、巻いた包帯をかたはしから調べ直していきました。

「!!!」

妙な...この、どす黒い青に変色した場所は、どうなったと言うのでしょうか。マシカは決して毒草学など詳しくはありませんが、それでもこうまで効き目の強い毒薬がそうそうあるはずないのは判っていました。

傷を負ってから一兩日とはたっていないはずなのに、不審に感じて思わず触れると既にぐんなりと冷たくなっていて、血も肉も、生命の炎を失って腐りはじめてしまっているのです。そしてその傷の奥のほうに埋まったまま残っているらしい小さなしこりのようなものが、上から触れた瞬間、異様なほどマシカの五感を脅かしたのです。

「ヨーリヤ!」

神の名を叫んではっと薬師は手をひきました。

悪意。純然な、誰かを傷つけ殺そうという、憎しみとさえ異なる苦痛。

恐怖にさらされながら右手を毒の口に触れ、左手で胸に小さく印を切りながら深く神々に祈ります。乱れそうになる呼気をつとめて整えました。と、心の眼の内側に、徐々に彼の肉体と魂を蝕むものの本性が浮かび、あらわになってきます。

いっそ、邪しまなまでに盲目的他害性...信じられないほどの...に、マシカは魂の底を傷つけら

れて震え脅えるのでした。

小さな、何のへんてつもない不格好な鉛のかたまりです。底を平らに削ったどんぐりの形をして、べつに呪句が刻まれているわけでもなんでもない品でした。

たしかに鉛毒は強烈です。けれどいったいどんな歪んだ力が働いて、神の血族たるエルフエリの肉奥深くにまで貫き通ってあるのでしょうか。

マシカに理解できたのはそれが、この世界の"外"に交わるものだということ、そのぎらぎらする邪悪さは決して大地の母神に認められたものではないという...異質な禍々しさだという事実だけでした。

(何が起こったの？ この世界に、何が襲って来たの？)

どす黒い不安が小さな魂をひき掴みました。飛仙の受けている異世界の害毒がマシカの心にも逆巻き流れてきて、そのままずると冥府の深みへと陥しこんでしまおうとします。鉛のどんぐりを埋め込んだ存在は昏い暗い闇の心象をもつものでした。

轟々と世界の縁より遅いきた黒炎が、すべてを滅ぼし喰らい尽くしてゆきます...

「嬢ちゃま？ 嬢ちゃまどうしただ？」

荒々しく肩を揺すぶられて危うく瞳を開けると、そこには人の善いミニタのまるまるした心配顔があって、部屋にはあいかかわらず火の気とて絶えずに暖め明るめられてあるのです。

「なんでもない、大丈夫」

ひとつ頭をふって星紫色の大きな瞳をしばたかせ、いまだ着替えもせず生乾きの衣のままの少女は、心を決めたように厳しい顔をして立ち上がりました。

「ミニタ、縄をちょうだい。このひとを寝台にくくりつけて。」

「...嬢ちゃ...？」

「切るの。腐った肉をどけないと、このひと死んじゃうわ」

蒼白な顔をして短く言いきると細工物の懐剣をひきぬいて暖炉の中心にかざします。鍋の薬湯の量を確認してさらに沢山の葉と根をついで足し、そういったことをやりながら意識をだんだんに空白にしていきます。

熱に浮かされたエルフエリの、宙をさまよう心を捕えようとしてしました。

(どうか...。 痛みの半分は私のものです)

かすかに呼びかけに応じて触れてくるものを感じた時、手の平が灼けるほど熱くなった短剣をかざして、マシカは再び寝台の前へ戻っていきました。

肉の焦げつく臭いと、毒に侵された血液のおぞましい色彩。弱り切った飛仙にはもはやもがくだけの力もなく、ただ低くもれる悲鳴のその響きをマシカは歯を食いしばって耐えなければなりません。

幼いほそ腕が情け容赦なくエルフエリの体に刃をねじこませていきます。どす黒く血肉にまぶれた鉛玉がやがて緑色に腐り果てた筋に噛み込まれて姿をあらわしました。

「知神よ、酷い...！」

マシカの白くなった唇からひとすじ紅いものが落ちました。

たとえ永らえたとしても天駆ける一族の貴人は一生不自由な体となるでしょう。それでも一瞬

とてためらうこともできず、剣を持つ手は必要なことを果たすのでした。

泣き崩れてしまいたい心を冷たく耐えながら、一方でマシカはできるかぎりしっかりと、己の心をエルフエリのそばへ、苦痛をわけあうほどにそばへと寄せるよう努力を続けていました。

苦痛や恐怖を共有し、ときによって分け合うこともあるのは薬師に独特の力です。

自らの手で肉を裂き、毒血を吸い出すその激痛を味わうあいだ、ふたりの心は賢明に繋ぎあわされて、マシカの瞳は一時に五十も齢を重ねてしまったかに見えます。

ひどい油汗をしたたらせてマシカは刃物を置きました。

ミニタは、少女が薬師らしく終始しゃんとして、それから幾日ものエルフエリの危篤の間中、ろくに寝もせずに見取り続けていたと言い張ります。それは確かにそれで枕元をすこしでも離れるのが怖いと感じていたのです。

けれどもそういった現実はずべて漠として、幾晩も幾晩も、永遠の夜が続いたようにしか、後になってみるとマシカには思えなかったのです。

ごうごうと苦しい幻は逆巻き流れていきました。...どうか。どうかこの嘆きがよく癒されてくれますようにと。このままではあまりにも、それは哀しすぎるのでした。少女の頬からひとつぶふたつ、透明な光をはらんだ涙が、握り合わせたエルフエリの手の上に着かかれました。

「マーイアルフ（森の花）」

かすかに呼ぶ声が静寂になじんだマシカの耳をうちました。

「居たのか、そこに」

沼のように深い色合いの瞳がぼんやりと、けれど真っすぐにマシカを捉えていました。その瞬間、少女はその場に在るのが己れだけではないということをはっきりと悟っていました。

「...ええ。お兄様」

限りなく優しく、誰かがマシカの喉を通して語りかけ、微笑みかけます。

「いますわ、ここに。」

病んだエルフエリと、少女の魂に宿った仙女は、ただ静かに見つめあっていました。やがて穏やかな笑みを浮かべて、飛仙はふうっとその顔を閉じました。

「やすらかにお休みなさいませ。どうか...」

熱も荒い呼吸も、もう彼を苦しめることはありませんでした。そうしてある朝、嬢ちゃまを起こしにきたミニタは見たのです。

さしこむ朝の陽光のなか、不思議な戦士はやすらいで横たわり、少女が、その手をしっかりと握りしめたまま、枕辺で幸福に眠りこんでいる...神々の手になる一幅の絵画のような、神聖で輝かしいふたりの姿を。

(次に目覚めた時、) (高校?)

(次に目覚めた時、) (高校?)

2016年3月25日 リステラス星圏史略 (創作)

次に目覚めた時、マシカは一瞬自分がどこにいるのかが解らなくてとまどいました。それから見馴れた自分の部屋の寝台に居るのだと気がついてほっと息をつき、エルフエリのことを思い出して慌てて起き上がりました。

飛仙は本当に救ったのです。わずかにれんじ窓をずらせて秋の陽差しのゆらめく部屋の中で、穏やかな寝息をたてて眠りについています…。きちんと厚物の上衣を身に着けて来たマシカを見て、火の番をしていたミニタは満足そうに黙って台所へとひきさがりました。

幾日か、エルフエリはまだ少し熱の残る額をしてうとうととまどろみ、時折りふっと目を覚ましては枕辺にある少女の姿を見て微笑んで、それで安心するのか再び穏やかな眠りの淵へと沈みます。日に二三度、薬湯や薄めた肉汁などを口元へ運ぶと、大人しく、与えられるだけの量を飲みこんでいるようでした。

ミニタはエルフエリのために使い切ってしまった分を補充しに、毎日背籠を負って一人で薬草摘みに出掛けて行きます。山家のぐるりにはぼうやりと秋霞が白くおりているようで、空の色の光りが柔らかく薄れるかわり、何故だか精霊たちに保護されてでもいるような安心感を住む者たちに与えるのでした。

村の方から男衆が一人、薬師の帰り知らせが例年より遅れているのがどうした訳か、荷薬草が仕上がったなら運び出すのに男手をよこすがと、ある日山を登って様子見に来ました。それへ適当な言い訳をして(未熟な薬師だというのはこの際ツゴウのいい事でした)送り帰り、部屋へ戻って来た時...マシカは、今日こそははっきりとエルフエリが目を覚ましているのに気がつきました。

驚きはしませんでした。予測はついていたし、むしろほっとした位です。それでも思わず戸口の所で立ち止まってしまったのは、その深いふかい、少し哀しげな海の藍色の瞳が、神さびて思わせる程に美しく、一線に少女を捉えたからでした。

「あ、...」

エルフエリは何かを言いかけて、かすかに笑って起き上がろうするようです。いつも居るはずの少女の姿が見えないのを不審に感じていた所なのでしょうか。

慌てて、マシカは手にした木鉢を棚に放り置いて寝台に駆け寄りました。

「未だ、お起きになってはいけませんわ、エルフエリさま！」

けれど、信じられないことに、長いあいだ寝ていたはずの飛仙は何とかして一人で上体を起こしてしまいました。どころか包帯だらけの体で出来得る限り、優雅に仙族風の一礼をさえしてのけたのです。

宮廷の貴婦人かのように扱われて山娘はすっかりどぎまぎしてしまいました。それ以上に、薬

師として、やっと縫い合わさった肩の傷が開いてしまいとは、心配していたのですが。

「私はミルドナーの長子にしてフェルンストウツの後継。飛仙一族（エルフエリニレ）のフェルラダルと言う。」

ゆっくりと、正式の名を貴人は名乗りました。

「御名を教えていただけようか、我が命の救い手殿。ここは何処（いずこ）の地であろう」

「あの...」

山娘はすっかり畏まってしまって口ごもるのです。

「お星さん（マ・シカ）とだけ呼ばれています。...あの、きちんと名乗りしない失礼な奴と御思いにならないで下さいませ。あたしは親の顔も知らない拾われ児だったそうですし、育ててくれたおば様からも真（まこと）の名を貰わない内に死に別れてしまったのです。」

病みあがりの少し疲れた貌でエルフエリは肯きました。星（シカ）...仙族語で言う昴（マリ・シクリア）...とは、大地に根ざして生きるダレムアスの民にして、随分風変りな命名だと感じながら。

「あたしは村の薬師をしています。ここは神域マドリアウィにも程近い、"道の果ての村"...ミアテイネア地方のミアトの国ですわ。」

「山人（ミアト）の国。」

驚いたようにエルフエリは言いました。

「それでは私はだいぶ道を外れてしまった。真っ直ぐに東を目指した筈であったのに。..."道の果ての村"? それでは何者かが私を呼んでいるように感じられたのは、あれはシクリアリデル...星ヶ沼...だったのだろうか」

「あそこを御存知なのですか? その、あんな小さな沼を」

静かに笑った飛仙はそれには答えず、再び深々と辞儀をしましたが、今度は少しそれが辛いようでした。

「とにかく幾重にも礼をのべよう。小さな私の山の姫。あなたは二つの意味で私を救ってくれた。」

「あたしみたいな者は姫などではありません。」

焦れて打ち消しながらマシカは細っこい腕をさしのべました。

失礼は、承知の上でしたが、ともあれ薬師なのでしたから。

「もう横になって、大人しく御休みになって下さい。やっと傷がふさがりはじめたばかりだっというのに、起きあがるなんてそもそも無茶なんですエルフエリさま。」

かすかに苦笑して、飛仙の方はと言えば、されるがままに大人しく横たわっていました。

「エルフエリは口数が少なく、」 (中2?)

「エルフエリは口数が少なく、」 (中2?)

2016年2月18日 リステラス星圏史略 (創作)

エルフエリは口数が少なく、...まだたくさんの血を失ってしまったばかりです。意識が判然（はっきり）とはしてはいないのでしょう... うとうとと眠っては目覚める回復期に入ってからおしばらくはほとんど喋りませんでした。未だ時折りはうなされて『マーイアラフ』の名を呼び求めるのですが、その度にマシカがのぞきこんで声をかけると、ふっと目を覚まして大丈夫と言うようにかすかに微笑えんで見せるのでした。何日かがたちました。

何かがちらちらと心の中に見えてくるような気でした。そうしてマシカはそこにいてミニタに薬湯の量を指示したりもしながら、心はひきずられ出てどこかよそにあって、エルフエリが繰り返し繰り返し追いつづけているひとつの情景を、見つめているのでした。

まさかこのような事になるとは思ってもありませんでした。彼達は皆一様に、うかとおとりにつられ出た愚かさを嘆き呪い...くやみつつ、誰もが城への血路を開こうと馬を翻しておりました。城へ。美しき白の皇都へと。けれどさすがにわなのしがらみは重く、一大里とかせぎもせぬ間に彼らは目にしたのでした。

城が燃えています。天を焦がさんばかりに暗い夜空に照り映えておりました。”彼”は...もはや己れの率いる大隊にすら心をおかず、ふわりと最大速でその夜空に駆けあがっていました。

「マーイアラフ！」

...実に見事なものでした。見事に城中は火の手に包まれ、もはや防戦にこれつとめる兵士達の姿すら皇都の辺りには見つけられないのでした。

どっどとうと鬼達の黒い波は揺れています。眼下にくりひろげられる女官や傷を負った戦士を相手のせい惨なさつりく...しかしそれにすら彼は気をも止めません。

「マーイアラフ！」

石造りの棟の多い奥宮の辺りにはまだ火焰は薄く、そこここに倒れて火を放つ大地の民の体を踏みこえて、長い長い聖なる回廊をひたすらに走って行きました。途中にはいくらかも鬼がいました。彼は闘い、

「マーイアラフ！ マーイアラフ！」

彼は扉を叩いていました。奥宮の広間を開く扉です。そこにたどりつくまでに切り裂いて来た多くの敵達の動向も、踏みこえて来た同邦の無惨になぶられた遺体の数々も、否、己れの負っている深傷の痛みをすら、彼は案じてはいませんでした。彼の心にあるのは唯一人の安否、その他の全てをもおいて、それだけなのでした。

「御名を、教えていただけようか。」 (中2?)

「御名を、教えていただけようか。」 (中2?)

2016年2月18日 リステラス星圏史略 (創作)

気がつくといつの間に無理に上体を起こしたのか、

「御名を、教えていただけようか。我が命の救い主殿？」

「あの...」

まだ不自由なはずのエルフエリの、美しい姿で、宮中の高貴な女性に対するような礼をとられて山娘はもうすっかりどきどきしてしまっていました。

「マ・シカ（お星さん）とだけ呼ばれています...あの、きちんと名乗らぬ失礼な奴と思わないで下さいませ。あたしは親の顔も知らない拾われ児でしたし、育ててもらったおばばさまからも真の名を貰わない内に死に別れてしまったんですわエルフエリさま」

少しやつれたエルフエリは穏やかに肯きました。

両手の平ですくえるくらいの丸まっこい素速い茶色の毛皮の生きものが心配していたように馳せおりてきてマシカの体にかけるぼりしました。

「マ・ボナンさん！ 来られなくてごめんね」

「栗鼠熊（ビヨラマイエルン）！」

エルフエリはそっと呟きました。

「それは神域（マドリアウイ）の中にだけ住み、けして狩りをする人間族にはなつかないと言われていた利口な古い種族だったのです。

「こんな事を聞くべきじゃないっていうのは解っています。だけれどあたし、夢を見ました。何故だか流れこんできてしまったんです。

...白き都が燃えていました。暗い炎の中をたくさんのたくさんの鬼たちがうごめいていました。そして... あの肩は、マイラ...

あれは本当にあった事なのですね？ あの方は... セイラさま、我らが仙女皇（めのきみ）でいらしたのですか」

エルフエリの瞳が光を失い、かげりました。

「かしこい私の山の姫。この世には知らずに済まされる間には知らずにいた方が幸福でいられる事というものが確かにあるものだ。...皇に嫁ぎし仙族の娘は、私の妹だった。」

「飛仙には未来を見る能力がある。」（中２？）

「空をかける飛仙一族にはわずかだが未来（さき）の事を見はるかす能力があるのだ。」（中２？）

2016年2月18日 リステラス星圏史略（創作）

「空をかける飛仙一族にはわずかだが未来（さき）の事を見はるかす能力があるのだ。マーイアルフ...仙女皇君などは本当にすぐれた予見者であられた。真に見るべき瞳をもつ者ならば、より多くの未来を知り得ようが... 私の能力はそれにはおよばないが、それでもこれほど明確に刻まれた印をなら読みとる事ができる。

「本当の事だよ。その印ははっきりとその額に刻まれている」

マシカは小さく「え」という顔をしました。

「この額飾りのことですか」

そうではないとエルフエリは答えました。

「その宝石は単にあなたの力を象徴しているにすぎない」

小さな山の姫よ、あなたはやがてこのダレムアスの命運に深く関わる者たちの一人となるだろう。」

不意な冗談を言われてマシカは困ったように小さくほほえみました。一瞬のうちにしゃその意味がとらえられなかったのです。

「印...？」

「あなたの歩まれる道はこの先、幾度も危険と困難の波をくぐりぬけてゆくことだろう。その時のために私は二つ、あなたにさしあげておきたいものがある。私の命を救ってくれた事にくらべれば大した返礼とも言えはしないが。」

「エルフエリさま。あたしそんなつもりでお救いしたのじゃ...」

抗議しかけてマシカは口をとがらせました。

エルフエリはかすかに微笑んだように思われました。

「一体何が始まったと言うのですか」（高校？）

「一体何が始まったと言うのですか」（高校？）

2016年3月25日 リステラス星圏史略（創作）

「エルフエリさま。あの、あたしそんなつもりでお助けしたのじゃありません」

マシカは困ってしまって、少し驚いた様にフェルラダルを見上げて言いました。

「だけど...もしよかったら教えて貰えますか。何が起こったんでしょう。この大地世界（ダレムアス）に、一体何が始まったと言うのですか」

「かしこい小さな山の姫」

飛仙は表情を変えず、けれどその深みのある低い声の奥で哀しみと嘆きが静かにたゆたっていました。

「この世には常に、知らずに居られる間は知らないままであった方が幸福な出来事というのがあるものだ」

「解ります。それは」

少女は考え深げに肯きました。そのきらめく瞳の色は既にひと月前までの無邪気な子供のものではないようでさえありました。

「でもあたし夢を視ました。何故だか流れ込んで来てしまったんです。お城が...白い都の御城が真紅に燃えていました。大地の民（ダレムアト）が多勢死にました。昏い色の血です。夜でした。鬼が、信じられない程沢山の数の鬼が、昏い色の真紅な血と、昏い色の真紅な炎の中で、大地の民（ダレムアト）と戦って殺していました。そして...」

魂をひきちぎられるようなフェルラダルの哀しみを思い出してマシカは身震いしました。

「教えて下さい。あれは、美しの白き都（ルア・マルライン）ですね？御隠れになったのは、セイラさまなのですか」

フェルラダルは何も言わずただ少女を見つめ、やがてマシカの瞳から静かに二筋の涙が流れ落ちました。

「では...本当にダレムアスの皇都は陥ちたのですね。御降嫁された仙女皇（おう）が死なれる位ですもの、皇（おう）陛下も...」

衝撃に崩折れるのではと気遣ってさし伸べられた飛仙の腕にすがり、それでも気丈に少女は、「大丈夫です。あたしは。一体何が起こったのでしょうか。誰が大地の皇を弑（しい）し申しあげたりなど出来得たと言うのですか」

「ボ・ルドガストム」

伝承の彼方に眠りかけていた名前を飛仙は短く口にしました。その言葉は星の娘を打ちました。開けき大地に生まれ育つ者ならば誰もが知っている、神つ時代の恐怖。神々をこの世界から衰退せしめた...

マシカは今度こそ本当に自分を支えていられなくなりました。細い体から力が抜けて行きそう

になるのを、エルフエリは哀しい程に優しく抱きとめていました。

北からの風が鳴っています。星ヶ沼の水面がさざうって白い浪が老木の根を無言で襲うのです。楡の樹は小枝をゆるがせながら、けれどなおも大地にどっしりと根を張っているのです。

その枝々のどこかで、栗鼠熊のカン高く秋鳴く声がします。

「星の娘（マ・シカ・ドリーシャ）。小さなわたしの山の姫よ」

少女を抱きとめたまま飛仙は語りはじめました。

「長い時代が来る。我らは皇（おう）を喪い...女皇（めのきみ）を喪い...仙族の高貴の血をも引く皇子達と皇女とはようとして行方が知れない。皇無き時代が来るのだ」

「信じられません。上古、あたしたちはボルドムによって」

マシカは黙って少し体を起こしました。フェルラダルの双腕は剛（つよ）く、暖かく、それでも少女はそのなかから離れて立ったのです。風が朽葉色の髪をかなしくさらって行きました。

「我ら飛仙は少しだが未来（さき）を視る。ただ星とだけ名乗るわたしの小さな姫よ、貴女が何も欲しいものがないと言うのなら、わたしの方から差し上げたいものがある 名前

我ら仙族の言葉で『星の娘』と言えば山百合のことだ。これからはそう名乗られるといい」

「山百合（サユライ）？」

「そう。そして、これを。あなたのものになさい。」

飛仙の貴人は白っぽく多彩な光を含んで輝やく不思議な掌ほどの大きさの丸い宝石をさし出しました。

「飛仙の家系に代々伝わって来た宝玉、"ルマルウンのかけら"と言う。」

「哀神ルマルウンの、あの...!!」

マシカは息をのんでその美しい珠を見つめました。

「受けとれません！ そんな...そんな、神々の力をひく宝を、あたしみたいな子供が」

ふっと弱い笑顔がもれるのを見上げ、

「我ら仙族は皆わずかだが未来（さき）を見透かす力を持つ。あなたは遠からずいずれこの大地世界の命運に深くかかわる一人となるだろう。いつか役に立つ日のために持っておいでなさい。」

「わたしの唯一だった望みは既にして果たされ得ぬものとなってしまった。わたしの前にこれを持っていた女性（ひと）を思い出させられるので、辛いばかりなのだ。」

「よく陽の当たる庭先で、」（中２？）

「よく陽の当たる庭先で、」（中２？）

2016年2月18日 ヒロシマ+ナガサキ<フクシマ=【地球】!!

よく陽の当たる庭先で、マシカは椅子とハサミを持ち出してエルフエリのざんばらになってしまった美しい髪を切りました。少し震える手の刃の間から空気のように細いあわい髪の束がぱらりぱらりとおちていきます。雪の降る様を見ているようでした。やがて二人の足元まわりが秋の陽ざしに光る銀緑色にうっすらおおわれてしまうと、マシカが刃を置くひまもなく、一瞬の風が美しい失われてしまった髪を悼んでさらさら深い空の中へと流し運んで行きました。

「マシカ殿」

エルフエリは静かに静かに言いました。

「私はもう旅出たねばならない。小さな山の姫よ、私の剣と荷はどこです？」

~~ふわりと...無礼を承知で、少女はエルフエリの肩を抱きました。~~

~~「駄目です。御返ししませんわ。まだやっとお起きになれるようになったばかりですのに。エルフエリさま。」~~

ふわりと...無礼を承知で少女はエルフエリの肩に腕をまわしました。何かを言おうとしてやめました。

「明日まで...せめて待って下さいフェルラダル。旅出ちの仕度をしますから。飛仙の御方は飛ぶ間は透輝水というものをしか召しあがらないと聞きました。そんなものを用意するのはとても無理ですけど、あたし、星ヶ沼の中でも一番澄んだ水で、ミアマアセラスの薬種をかもしておきましたわ」

その夜もだまって飛仙は

「私はもう発たねばならない。」（高校？）

「私はもう発たねばならない。」（高校？）

2016年3月25日 リステラス星圏史略（創作）

よく陽の当たる庭先で、マシカは椅子とハサミを持ち出して痛んでまちまちの長さになってしまったエルフエリの美しい髪を切りました。少し震える手の先から空気のように細いあわい銀緑色の房が、ぱらりぱらりと流れ落ちて行きます。雪の降るさまを見ているようでした。やがて二人の足もとがうっすら覆われてしまう頃、刃物を置く暇もなく一陣の風が吹きこんできて、さらさら、美しい仙族の象徴を悼んでか、深い空の彼方へとさらって行ってしまいます...

「マシカ殿」

髪を預けながらエルフエリは静かに言いました。

「私はもう発たねばならない。小さな山の姫よ、私の剣と荷はどこです？」

ふわりと...長い最後の髪の一片が風に溶けこんで消えました。マシカはためらい、断りたいと本気で考えました。傷は未だ良くなり切ってもいけないのです。もっと治療と休息が必要なはずでした。何よりもその心に。

この、自然的な勘の鋭い少女は推測するでもなしに気がついていたので。エルフエリは、最悪の死の誘惑にこそ打ち勝ってはいましたけれど、その魂は喪われたもののあまりの大きさに傷つき病んでいました。このままいかせてしまっただけではいけないのです。絶対にいけないのです。

しかし同時に知ってもいるのでした。彼は、行かなければなりません。重い責任を引き受けるために、再び闘いの中へ。...それは、子供ながら薬師の役を務める者になら、おぼろげであろうとも理解しなければならない事実でありました。

「どうしても...？」

道具を静かに片づけてしまうとかすかに鼻を鳴らして少女は両目をこすりました。悲しかったのではありません。いえ、とても哀しかったのは確かでしたけれども、それ以上に、何もしてあげられない自分が歯痒くて、口惜しいのでした。自分がいまだ小さくて未熟なのが嫌でした。おばばなら...と、そこまで考えて少女は首を振ります。考えてもそれは仕方のないことでした。

「明日まで...せめて待って下さい。フェル。」

やっとの思いでそれだけを言葉にすると、降りかえり立ち上がろうとする飛仙にくるりと星の娘は背を向けました。

「旅出ちの御仕度をしますから。飛仙の御方は虚空を旅される間は透輝水というものをしか召し上がらないのだと聞きました。そんなものを用意してさしあげるのはとても無理ですけど、あたし、星ヶ沼の中でも一番澄んだ所の水で、ミアマアセラスの薬酒を醸しておきました。」

その夜も黙って飛仙は夕食をとりました。マシカはミニタに手伝わせて、遅くまであれこれと最後の仕度を整えながら、時折ふと再び満ち始めている秋月を見上げては、手の動きが停まっているのでした。

もう全て語られるべき事は終わってしまいました。（高校？）

もう全て語られるべき事は終わってしまいました。（高校？）

2016年3月25日 リステラス星圏史略（創作）

もう全て語られるべき事は終わってしまいました。風が吹いて、マ・バルナがどうと揺れます。條々の葉が一斉に裏がえって、冬になりそめの陽ざしを、きらきらとはじくのでした。

エルフェリはただの山娘にすぎないマシカの前で、まるで白き都の宮中で女皇（めのきみ）にでも拝するかのように敬々しく膝をつきました。そして静かに、その額飾りの上にくちづけたのです。

上位者が祝福を与えるというよりも、小さな娘が聖なる神々だとでもいった風な口づけでした。彼はささやくように飛仙の貴人同士の、古来からの別れの言葉を告げました。

「ル・サランナラン、ウ・オルンノルン、カイザム。

（あなたの行かれる道があなた自身のものでありますように）...！」

その、異世界から仙一族の始祖が持ち来た言葉の意味をマシカは理解しませんでした。それでも少女は黙って真っ直ぐにフェルの見つめる眼を見返して、やがて言ったのでした。

「また、いつか、会えますね」

それは確かな予感、清浄な少女の、予知とも言うべきものでした。

エルフェリはふっと微笑んで、

「あなた自身が、それを望むのならば、必ず。」

飛仙の姿はみるみる空の高みに溶け込んで、小さくちいさく遠くなってしまいました。

マシカはいついつまでも目を細めて東のかたを見送っていました。

それから...西方の彼方を。

北からの風が轟と鳴ってどうと鳴って森を揺るがせにして通り過ぎて行きます。マシカは流れていく髪を片手で払いのけて、最後に、もう一度だけ真東の空を見透かしました。

冬の時代が来るのです。

それから山百合は、もうずいぶん遅れてしまった村里に降りる仕度を片付けに、すたすたと山を下って行きました。

=====

(2016.03.25.出しました。)

次に目覚めた時、マシカは一瞬自分がどこにいるのか判らなくてとまどいました。それから見慣れた自分の部屋にいるのだと気付いてほっと息をつき、エルフエリのことを思い出して慌てて起き上がりました。

飛仙は本当に助かったのです。わずかに木窓をあけて秋の陽射しのゆらめく部屋の中で、穏やかな寝息をたてて眠りについています…。

きちんと厚手の上衣を身に着けてきたマシカを見て、火の番をしていたミニタは満足そうに黙って台所へ引き下がりました。

幾日か、エルフエリはまだ少し熱の残る額をしてうとうととまどろみ、時折ふと目を覚ましては看病にあたる少女の姿を見て微笑を浮かべ、それで安心するのか再び静かな回復の夢のなかへと沈んでいきます。

日に四回、薬湯や薄めた肉の汁などを口元へはこぶと大人しく飲み込んでくれるようなのが、今のマシカにはなにより嬉しいことでした。

ミニタは飛仙のために使い切ってしまった薬草の種類を補充しに、毎日葉籠を背負ってひとりで薬草摘みに出掛けて行きます。

山家のぐるりにはどうしたわけかこの数日、淡い白い霧がとりかこむように降りていて、何故か精霊たちに守られているのだろうという気が住む者たちはしているのです。

毒の痛手もほとんど癒えたエルフエリがとうとうはっきりと目覚めた時、その深いふかい少し哀しげな月夜の沼の藍色の瞳にとらえられた少女はわけもなくうろたえて身のおきどころのないように感じました。

「ここは…」

「まだ、お起きにならないで」

マシカは手にした薬鉢を放りだして枕元にかけてよりました。

「十日も寝ておられたんです。無理ですわ！」

けれど信じられないことに飛仙は自らの力で寝台の上に起き上がってしまいました。どころか包帯だらけの体で可能な限り優雅に仙族風のお辞儀などしてのけたのです。

「あの…」

宮家の貴婦人のように扱われて山娘はすっかりどぎまぎしてしまいました。無論それ以上に、薬師としてやっと合わさった傷口が開いてはと心配していたのですが。

「誠心をもって御礼申し上げる、我が生命の救いの君」

湧き水のひびきいるように、聴く者の心をゆらす声でした。

「御名を頂けようか？ 我は飛仙の一族、ミルスドリアの長子にしてフェルンストウーラの正嫡フェルラダル、...あなたがたの人族の言葉では《銀の楡》と呼ばれる者」

「楡の樹（マ・バルナ）？」

思わず聞き返してしまってから薬師の少女はうろたえて真っ赤になりました。

「無礼をお許してください、お星さん（マ・シカ）とだけ呼ばれています。捨て子、でしたので、名乗るべき名がないのです...」

「星の姫（マリス・シクリア）」

病みあがりのまだ少し蒼醒めた貌で仙族はうなずきました。

星（シカ）...仙族語でいう昴（シクリア）...とは、大地に根ざして生きる人の子にしてはずいぶん風変わりな命名だと感じながら。

「あたしは薬師です。ここは神の峰アドリアウィに近い旧街道、道の果ての村...ミアティネア地方のミアトの国ですわ」

「山人の国」

驚いたようにエルフエリは言いました。

「それでは私はだいぶ道を外れてしまった。まっすぐに月の出るかたを目指したつもりであったが...」

旧街道というからには、もしや星ヶ沼（シクリア・リテル）が私を呼びよせたのだろうか？

独白のようにつぶやいた飛仙の言葉をマシカは聞き逃しませんでした。

「あの沼をご存知なのですか？ あんな、山の中に隠れた小さな場所なのに...」

静かに笑って飛仙はそれには答えず、再び深々と辞儀の仕草をしましたが、今度はすこしそれが辛かったらしく、わずかに顔をゆがめて息をつめました。

「...とにかく、幾重にも御礼申し上げます。小さな我が山の姫」

「あたしみたいな小娘は姫などではありません！」

焦れて打ち消しながらもマシカは腕をさしのべました。飛仙に対して非礼は承知の上でしたが、ともあれ薬師でしたから。

「もう横になっておとなしくお休みになって下さい。やっとう傷がふさがりはじめたばかりだっというのに、起き上がるなんてそもそも無茶なんです」

かすかに苦笑して、飛仙はといえばされるがままにおとなしく横たわっていました。

よく陽のあたる庭先でマシカは椅子とはさみを持ち出して、焼けて無惨に長さがまちまちになってしまった飛仙の髪を切りました。少し震える手の先から風のように細い淡い銀色がぱらりぱらりと流れ落ちていきます。

雪のふるさまを見ているようでした。

「マシカ殿...私はもう旅立たねばならない」

両のまぶたを閉ざしたまま飛仙は静かに言いました。

「小さな山の姫よ、私の剣と荷はどこに？」

ふうわりと長い髪が秋の誘いにさらわれて空に溶け込んで去りました。マシカはためらい、このまま冬を飛仙に越させたいと本気で思いもしました。

傷はかたちばかり癒えたとはいえ、もっと治療と休息が必要なはずでした。けれど同時に、彼が行かねばならないことも、幼くして薬師である重責を背負っている少女にはおぼろげに理解しうることでした。

「...どうしても...？」

道具を静かに片づけてしまうと、つんと鼻のおくで潮の匂いがするようで、マシカは顔をしかめて耐えました。

伝えることのできない不思議な哀しみにからだは透き通るようで、それ以上に、何もできない子供の時分が齒がゆくて悔しくて、ただ首をふる以外しかたもない事なのです。

北からの風が鳴っています。星ヶ沼の水面がさざめいて、白い浪が老木の根元をだまってさらっていくのです。

「星の娘。小さな私の姫よ」

マシカは黙って少し体を起こしました。フェルラダルの双腕は剛く暖かく、それでも少女はそのなかから離れて立ったのです。

朽ち葉色の巻き毛を風がかなしくさらって吹き上げていきました。

「それではひとつだけ。...私が贈る名を、真の呼び名として受け取って頂けようか」

「名前を?!」

それはマシカには思いもよらず、だからこそ誰も知らぬまま心に秘めていた願いでもあったのでした。

「そう。我ら仙族の言葉で野の星（ウエタ・シクリア）といえは山百合のこと。ゆえにこれからはそう名乗られるがよい。」

「山百合（サユライ）...」

もうそしてすべては語られてしまいました。銀の楡はただの山娘にすぎないマシカ...いえ、サユライに、まるで白き都の女皇にでも拝するように敬々しく膝を折りました。そして静かにその額飾りの上にくちづけたのです。

「あなたの行かれる道があなた自身のものでありますように...」

その、古いふるい神々の祈りの言葉をマシカ・サユライが耳にするのは初めてでした。

それでも少女はまっすぐにフェルラダルの見つめる両眼を覗きかえして、深い沈黙を見につけ、やがて言ったのでした。

「また、いつか、会えますね」

エルフエリはふっと微笑してわずかに身じろぎしました。

と、見るまに地を離れたその体躯はおどろく暇もなく空の高みに溶けこんで小さく遠くなって

いきます。マシカはいついつまでも目を細めて東のかたを眺めやっていた。それから...西の空を。

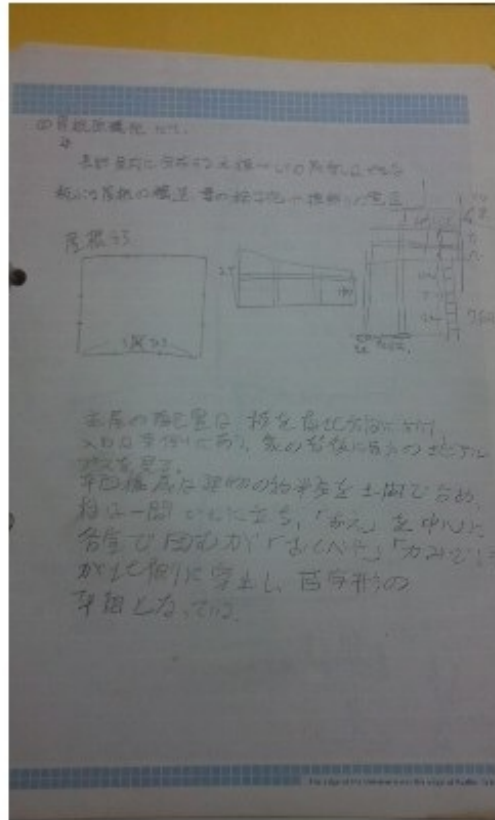
冬のはじめの下ろしの疾風が轟と呼んでどうと鳴って森を揺るがせにして通り過ぎて行きます。マシカは流れていく髪のを片手ではらいのけて、最後にもういちどだけ真東の高みを見遙かしました。

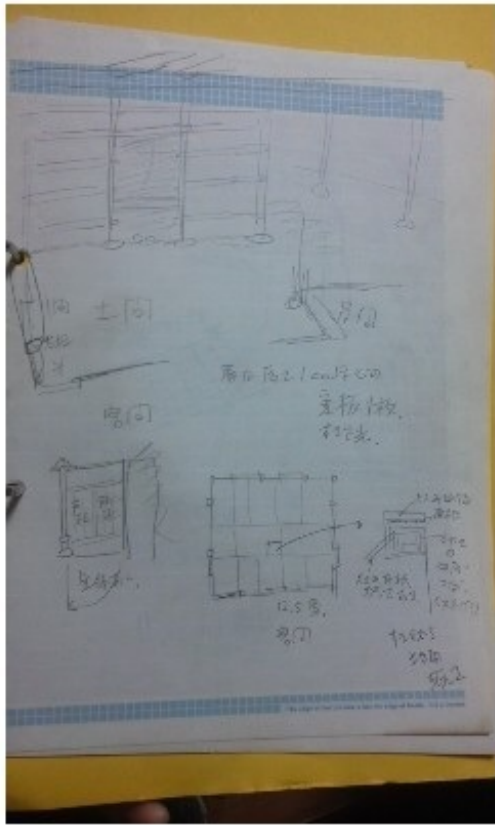
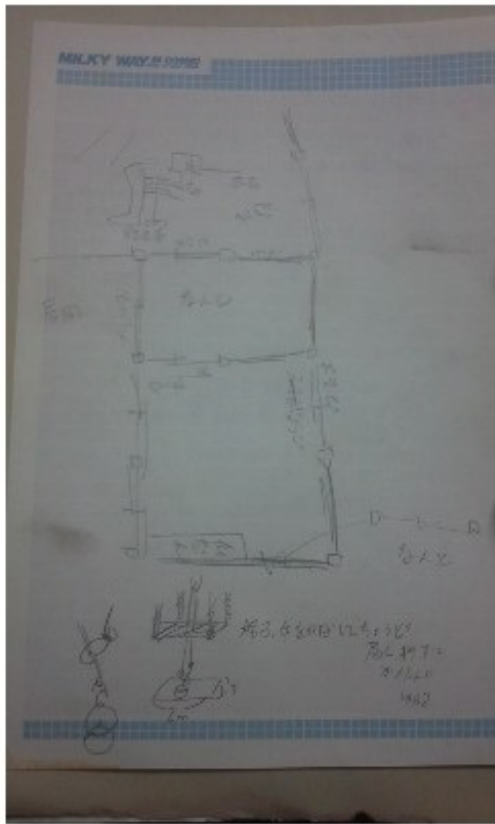
冬の時代が来るのです。それから山百合はもうずいぶんと遅れてしまった村里に降りる支度を片付けに、すたすたと山を下って行きました。

(借景資料集)

「取材メモw」 1 (@専門学校1年?)

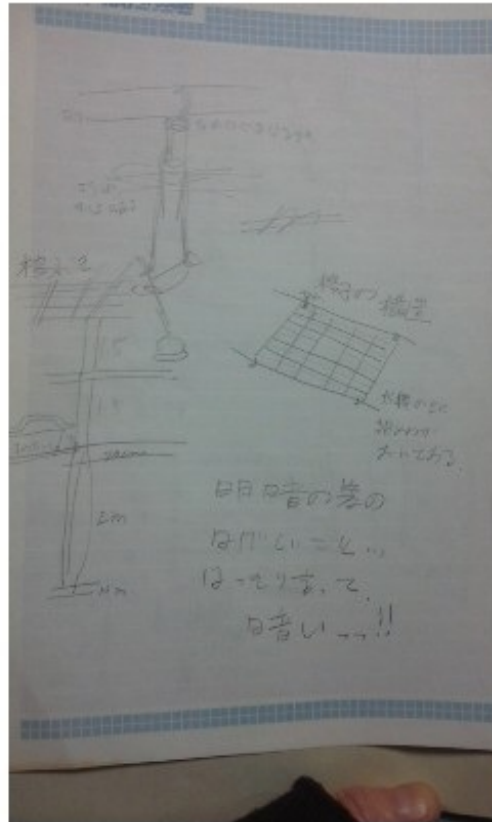
2016年2月12日 リステラス星圏史略 (創作)

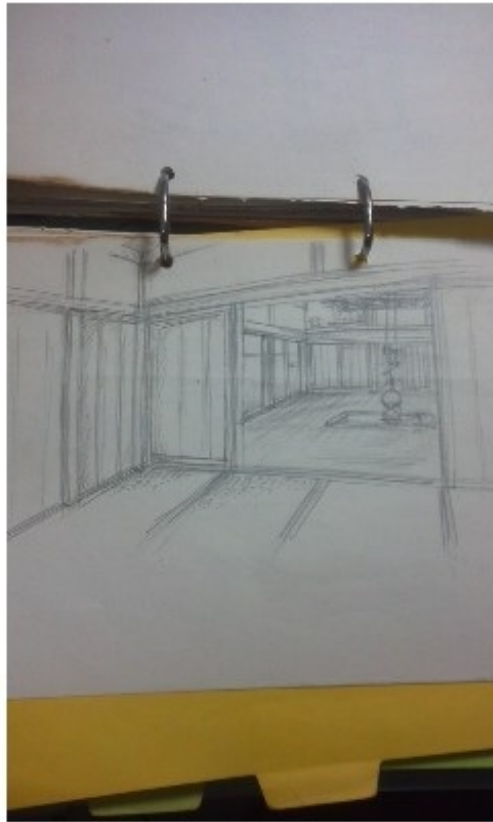




「取材メモw」 2 (@専門学校1年?)

2016年2月12日 リステラス星圏史略 (創作) コメント (1)





画像2と3の綺麗なラフスケッチをを描いてくれたのは...

(^^;) ...

自称「取材旅行」と称した貧乏長野旅に同行してくれた、当時の同人誌仲間の、ハルアキ君かタツヒラか、もしかしてミソコさんだったかもしれないが...

ごめん。記憶不鮮明... ☆

「ま、ばるな！」@「西洋紫ブナ」さん♪o(^-^o (2015年10月22日)

<http://85358.diarynote.jp/201510221402379406/>

「ま、ばるな！」

2015年10月22日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

小学生？の時の夢に出てきたのはこの樹種だっらしい。

「西洋紫ブナ」さん♪o(^-^o

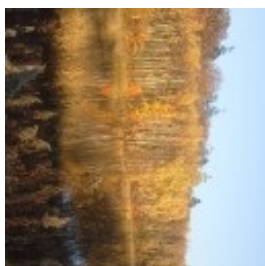


まさに「マシカの髪の色」！（^ 0 ^）！（画像1）（2017年10月27日）

<http://85358.diarynote.jp/201711012223572354/>

まさに「マシカの髪の色」！（^ 0 ^）！

2017年10月27日 [リステラス星圏史略](#) [（創作）](#) [コメント\(1\)](#)



（11月1日追記）

アップするの、忘れてた～☆？

コメント

霧木里守⇄畑楽希有（はたら句きあり）

2017年10月27日21:30

先ほど無事帰投。（^o^）／

画竜点睛は欠いたし作業予定の目標未達ですが、数年来の懸案事項が2つまとめて片付いて、家賃とガス代も振り込んで来たし、札幌に来てからできた唯一の友達と言っても過言ではない

(^_^;)道すがらの犬さんが待ちわびてくれてたのへ動物整体して老化による体調不良を改善してあげられたし、紅葉も終わりの森林公園をのんびり歩いて、源泉かけ流しもわりとすいててのんびりつかれましたし...♪

穏やかで良い一日でした。

o(^-^)o

そうそう！

Coopで餃子が半額でしたよ！

♪へ(^o^へ)(ノ^o^)/♪

30個も！買っちゃった～♪

♪へ(^o^へ)(ノ^o^)/♪

(そして帰り道で...歩きながら...既に半分喰ったw)

明日からの再びパワハラ地獄に備えて、早めに寝ます！

コメント



[霧木里守≡畑楽希有 \(はたらけきあり\)](#)

2017年11月1日22:32

厚別の森林公園。みずほ池。

...これは...！（@◇@）！...まさに...！！（2018年2月2日）

<http://85358.diarynote.jp/201802020626023863/>

チャーリー（Lv52）さんがリツイート

laufen 克@2月6日まで初のクラウドファンディング実施中！ @katuka2・18時間18時間前

堅苦しい話が続いているので、ここで1枚私の撮った写真を...

こちらはオホーツク津別町の「最上のミズナラ」。

推定樹齢1200年、幹周り約6m、樹高約18mの巨木です。

辿りつくまでに車の下をこすりまくったり、虫が怖すぎたりしたけど、そんなものを全て吹き飛ばすエネルギーを感じました。

<https://twitter.com/katuka2/status/959035577696894976>



リステラス星圏史略
古資料ファイル 4-1
『山百合と銀の楡』

<http://p.booklog.jp/book/103201>

著者：霧樹里守 & 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/103201>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/103201>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ